

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰



麻生路郎賞「親譲り」發表

八月號

No. 387

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

昭和十三年八月一日發行
（每月一圓）
創刊大正十三年・通卷三百八十七號

9月本社句会

「兼題」
放 送
住 宅
い や 味
ス ピ ー ド

川柳雑誌社主催

本社八月納涼句会

暑中御見舞申し上げます

ゆかたがけで、開襟シャツで柳友お誘いのうえ、納涼句会へご出席ください。

日 時 八月七日(金)午後六時

場 所 文楽座別館四階

市電道頓堀電停南へ二〇米西側
市電日本橋二丁目電停北へ百米西側
(入口は右側から階段を上ってください)

兼 題 「別 室」(〇〇〇) 中島生々庵選

「雷」(〇〇〇) 菊沢小松園選

「ロングラン」(〇〇〇) 新川博也選

「ハンカチ」(〇〇〇) 佐野白水選

席 題 三 題(当日発表)

清 水 白 柳

呈 賞 賞各題天位 賞「別室」天位に不朽洞賞

会 費 百 円

幹 事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・

与呂志・白水・木堂・月都・薰風子・永断・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〇切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉四六〇八一

8月号発売中!!

食品と原資材・機械・包装の総合誌

食品と科学

パン特集

パンの現状と未来は
パン工場もオートメ化
どんなパンが売れているか
海外ニュース・特許告知板
夏の味覚「豆腐」の苦惱は
チクロの現状と使用状態
アイスクリーム夏の陣

【展望台】

主食・罐頭詰・菓子・酒類・飲料
調味・香料・強化剤・機械はか

◎ 本誌の購読は近くの書店でご予約になるか、または直接弊社へお申込み下さい。

年間予約購読料 1,200円(増大号・平共)

食品と科学社

大阪市北区本橋町五十五番地
電話 5231(代)~1番
振替 大阪 6702番

新刊

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五
振替 大阪 七五〇五〇番

若本多久志編 麻生路郎序

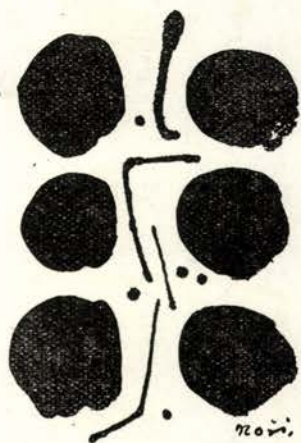
川柳親ごころ子心

定価 150円
送料 24円

偽り多い世の中に、親が子を思い、子は父親を想う至情こそ
真実一路のものと言えらるだろう。編者がその愛児を喪つた悩み
を川柳に転嫁して以来二十数年、「川柳雑誌」の川柳塔及び近
作柳樹の中から、親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根
気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、
集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知るこ
との出来る、実に有意義な書である。柳友諸氏の座右にお薦め
したい。

不朽洞句帖

麻生路郎



みおつくし鳴ったらババも帰ってや

原始とはいいいない糸もまとわな

聖書も持っていた売春婦のバッグ

奥さんもスリルの欲しい年になり

逢びきへ雨は広重ばりに降り

苦沙弥先生妻に一目おいて死に

平和主義者世に負けとは云わぬなり

一九五九年・八月

八月号目次

題字……………麻生路郎	表紙……………野尻弘
不朽洞句帖……………麻生路郎(一)	誰でも解る川柳……………高鷲亜鈍(二)
目標の相違……………川村好郎(三)	面白いと言う事……………金井文秋(四)
川名句と難句……………麻生路郎(五)	「ひ」と「ふ」の郷愁……………不二田三夫(六)
深草の百夜通い……………富士野鞍馬(七)	弟と卵……………杉本一鶴(八)
枇杷と百足……………東野大八(九)	ぞーっとした話……………豆秋・水客(一〇)
句評リレー……………多志方・喜由(一一)	雅号由来記……………新岡回天子(一二)
川雑川柳まつり……………橘高薫風子(一三)	懇親宴……………麻生路郎(一四)
特別「親譲り」発表……………麻生路郎(一五)	優勝楯を手にして……………西川晃(一六)
幽王句抄……………(一七)	
★	
川柳塔……………麻生路郎選(一八)	同舟近詠……………諸家(一九)
近作柳櫛……………麻生路郎選(二〇)	北川春巢選……………(二一)
一路集……………松江梅里選(二二)	他……………後藤梅志選(二三)
上品……………田中烏雀選(二四)	金泥集……………麻生護乃選(二五)
各地柳壇……………(二六)	不朽洞会から……………(二七)
柳界展望……………(二八)	パンの散歩……………(二九)



不栢洞の横にて(著者近影)

川柳 名句と難句

麻生路郎

〔二〇〕
十二時に寝た母いつか起きている

一家にとって母の存在ぐらいありがたいものはない。
(甲吉)

夜は誰れよりも遅く寝るし、朝は誰れよりも早く起きる。そしてみんなの面倒を見るが、決して決して不足らしい顔をしな

い。イヤ、どっちかと言えは、よろこんで世話をやいてるように見える。祝日の中に

に母の日があるのも当然だと言えよう。この句、母の一日をこくおおまかに叙してはいるが、母への限りなき同情と敬慕の念を汲みとることが出来る。

〔二一〕

みおつくし鳴ったらパパも帰ってや

「ドヤ、みおつくしの鐘が鳴ったら帰って帰るか」
「ウム、帰ってるよ」
(路郎)

出したつもりだが、どんなものであろう。次に、みおつくしの鐘を詠んだ例句を少

しく挙げて見よう。
①みおつくし大人が聞けばまだ十時
②キスすれば鐘がなるなり中之島
③みおつくしの鐘で指切りして別れ
④母の鐘子無し夫婦も聞いて寝る

(鬼酔) (小坊) (明二)

「でも、ママはボクらのことも心配するけど、パパのことはモットとモット心配してよ」となかなか痛いことをいう。子らは何処までも母の味方らしい。

この句は「帰ってや」と大阪弁で軽味を川柳の相違を思わせられる。③スケッチの

句として面白い。④子の無い家庭生活の淋しさを巧く詠んでいる。

次に、みおつくしの鐘のことを少しく述べておこう。

戦時中、野放しにされていた子どもたちが、とんだ自由のはき違いで、戦後になっても夜遅くまで遊びほうけて、不良染みた行動を平気でやるようになった。それをうられて、十時が鳴ったら帰宅するようにと大阪全市の婦人が結集して鐘をつくることになった。そして昭和三十年五月五日に市庁舎の塔上から「子らよ帰れ」と鳴り渡ったのが、みおつくしの鐘である。この計画には放送関係も協力したので、母の愛の結晶は意外に早く子らの間に徹底した。

この鐘の材質は銅、錫の合金で全面が青銅色の仕上げだ。鐘の直径は四尺一寸五分、高さは三尺(肩から下)、竜頭から振り子までの高さは六尺、重量は二十貫あるそう

うだ。〔二二〕
何時からかもう標準語捨てた仲

(求女)

若い女性と男性は標準語がお好きという訳でもないだろうが、方言ではなれなれし過ぎるし、標準語で話す方がインテリらしくていいと思っ、標準語を使ってるらしい。

ところが、この句はいつのほどにか彼女の彼氏となり、彼氏の彼女となるとお互いに親しみのある方言が話されるので、そこを「標準語捨てた仲」と詠んだのである。面白いネライの句だ。

〔二二〕

お前らは一票という存在さ

(みのる)

政治家の肚をこれぐらいズバリと詠んだ句はすくない。上五の「お前ら」にはいかにも横柄な政治家の態度がうかがわれるではないか。

〔二四〕

赤電話ぐずぐずせんと来んかいな

(豆 秋)

ターミナルの一隅の赤電話か。彼氏はいささかじれている。

「もう三十分も待ってるんやで。何をぐずぐずしてんね。」

「そうかて、お客さん、去なはれへんねわ」と、すこぶる甘い声。

「そこを、うまくこまかして、早よう来なあげへんがな」

「もう一寸待ってて」

「しあないやつやな」

と彼氏は受話機をガチャーンとおく。行先きは映画か、温泉マークか。そこまでは判らないが想像はすべてを美化するものだ。この句の情景を躍如とさせる大阪弁の

力は大い。

赤電話は委託・簡易公衆電話といういかめしい名を持っているが、器具がすべて赤く塗られているので赤電話の俗称で一般に親しまれている。たばこ屋の店先のが一番目につきやすいが、ターミナルは勿論街の

いたるところにハンランしている。赤電話の利用者は何んというても若い男女が多いらしい。

赤電話が実施されたのは昭和二十八年六月であるが、この時は委託公衆電話を赤に統一しただけであったが、昭和二十九年十月に、通話料を前納するダルマ型受話機が実現したのである。

〔二五〕

オイコラと言うていけないもどかし

(可 住)

民主主義、民主主義と言いだしてから警用語がスツカリ変って来た。オイだの、コラだのと言っではいけないということになった。なるほど人権を尊重して、オイコラなどは使わない方がいいとは思いますが、オイコラを使うようなケースが、いっこう減らないので、若いポリスにとってはオイコラの使えないもどかしさをしみじみと感じることであろう。

この句の作者が警官であるかどうかは知らないが、近ごろの警官心理を巧みに代弁しているのではなからうか。しかし、オイ

コラが人権軽視や人権無視への道に通じることになっては大変である。その点言葉の活用の重大さを思う。

〔二六〕

僕にまだマイクつきつけてはくれず

(宏 方)

少しは金も出来たし、一寸した役員もしているのに、ジャーナリズムが、てんで相手にして呉れないので、内心不満を持っている人は随分と多い。この句はそうした人の心境をズバリと「マイクつきつけてはくれず」と詠んだもの。

〔二七〕

一級で別れ二級で酔うみなみ

(きさ子)

一級酒を飲んで別れた。そしてみなみで二級酒を飲んで酔うたと云うのが、句の表であって、これだけでは何の変哲もない報告に過ぎないが、大阪人には

これで充分うなずかせるに足るものを持っているから不思議である。一級酒を飲んで別れたのは誰か。仕事の関係者である。飲んだ場所は何処か。言うまでもなく北である。ケチつく訳ではないがアツツリと切りあげていることが想像される。そして飲み足りぬことはみなみへ足を運んでい

るのが証拠だ。ここでは「オイ二級だよ」と気易く腰かけの客となっている。何処までもふところと相談をして飲むところに、大阪人の性格を巧みに表わしている。

大阪では戎橋筋から道頓堀、千日前一円の歓楽地帯をみなみと呼んでいる。

〔二八〕

自宅バー来い来いと若社長

(方 大)

近ごろ流行のホームバーをつくった若社長。人の顔さえ見ると、

「君は洋酒はどうだ」と訊く。

「大したことはありませんが……」

「そうか。近いうちにやって来たまえ。ホームバーを作ったから飲ませるよ」という。ついでに若社長も見せたいのだから。



★ホップのきいた本場の味…

サッポロ
ビール



豊中市 戸田古方

ひげを抜き終るとテスト終った

蠅よ起きているのは君と僕

スカタンなどで積極的になり

西宮市 若本多久志

御批判を乞う作品に自信あり

用意した言葉も出ずに別れて来

ホルモン剤無益なものと知り初め

気の毒な事故へ明日がまた続き

人生もいたるところが工事中

大阪市 正本水客

そろばんの汽車を叱らぬ父になり

窓ひとつひとつに人間がいるクレオン

いちばん軽い医者意見に頼るとき

大阪市 丸尾潮花

月曜の机は花の水もかえ

兵庫県 小西無鬼

酒許り買うて土産を買い渋り

勝浦にて

どんと来る濤も太平洋の味

町議推薦立候補

スローガン誰かが作ってやると云う

大阪市 西 いわを

バラの花不幸な家に乱れ咲き

二階迄上り真情ぶちまくり

頭の調律出来ているかと聞かれ

ホノルル 築山快夢起

出来すぎる子の行末に一苦勞

他人ごとの様に聞いとく妻の愚痴

ワイマル 羽佐間柳葉

民主の世でも勲章は嬉しがり

口だけの平和死の灰撒きわらし

奈良県 尾崎方正

マンボズボン折目は最初あったらし

堺市 吉田圭井堂

灰に書く額へ母親目をまるめ

茲は右ココは左と歩くさえ

山口県 国弘半休

厚狹駅改築新旧駅舎

たかどのおもえて靴が釣り合わず

ありし日の恋も朽ちなん古瓦

防府市 長野井蛙

天の声などと天をまはばからず

当選がもう用のない故郷を発ち

岡山県 直原七面山

理性崩す積りガブガブ女飲む

夫でないことだけは確かな子

娘をもちて貰う小膝を社長折り

世の中をなんのヘチマとガム噛む娘

靴下まで履かせてあげたのに浮気

大阪市 西 森花村

赤い血が切って出そうもない役人

ケチでよしもの生命は尊とけれ

就職も恋も彼女が先になり

夕桜判官さんは腹を召し

おぼろ月テルテル坊主白く浮き

豊中市 足立春雄

本で見た様には飛ばぬゴルフ場

老眼鏡忘れまごつく年となり

合敷市 木村千容

ガヤガヤガヤガヤ嗚呼日本の民主主義

健康長寿の話ばかりしてはるわ

金なんかいらぬと思う長者の死

あこがれの離れ竣工またず逝き

おじいちゃんただ心配をする役員

加賀市 野村味平

落書はうちのごんたの故にされ

大阪市 木村水堂

御経より政治で稼ぐ宗教家

鯉と鯉田圃の値段語り合い

端数まで妻が知ってた夏季手当

高槻市 福田丁路

未練なく自ら死ぬる人もあり

大阪市 真鍋一瓢



折伏でこれはこうせよ南無選挙
ハズ帰るあわれ変形した靴で

今日の餌も貰たぞタイムレコードよ

乾坤一擲母が浴衣を買わんとす

雲一つない空というきこちなさ

あれ位いで疲れる人間文化財

大阪市 佐野白水

ビルにはさまれ今に買収されそうな

逢引は定期のコース乗り越えて

住吉大社御田植え神事

結局は田植えお百姓さんまかせ

大阪市 後藤梅志

左り前ペーパーのないトイレット

日蓮さんみないなことを言いはじめ

経営はゼロだが運がまだのこり

米子市 小西雄々

座布団も敷かず税吏は法を説き

命日にかたわれ香をたきにくる

敗軍の将死に三面記事の隅

大阪市 吾郷玲人

実力も出せないままに病む不運

野球する子供に夏の陽も速い

大阪市 山川阿茶

唯一の遺産この腕この頭

大阪市 金井文秋

同窓会早速離婚したのも来

相談欄馬鹿は死ななきや治らない

受験の子母の問いなどうるさがり

加賀市 那谷光郎

出直して仲人口がまた変り

初対面話題が切れた蠅叩き

父ちゃんの様に飲むなと母は酌ぎ

大阪市 北川春巢

大あくびして運転手気をもませ

返事せぬわけはレースの目を数え

律義者どの写真でも手を重ね

親類へ泊ればサラリー訊いてくれ

下関市 桜川不水

みの虫になりたやサラリー二万円

庭先の草までほめて保険去に

俵山温泉にて

灸跡も既に人生過ぎた数

岡山市 浜田久米雄

血圧の二人は降りるまで話し

血圧は祖先のことにふれたがり

妻のいぬ場で血圧の話をし

岡山市 逸見灯竿

観光のバス冥途へも続く道

殉職といわれガイドに明日がなし

九十まで生きて暦のような人

神経を削る音なく宵寝する

大阪市 武部香林

転宅のさなかに俺の坐るとこ

引越しの荷物となって手を引かれ

大阪市 木下幽王

天皇の怒った顔も見てみまし

駅前で鉢植みたいな児が育ち

百合の花オシメシへの曝露主義

出雲市 尼 緑之助

岡山にて

薰風に月見橋は無表情

食事ベル天を恨まず施設の子

倉敷にて

ピカソマチス我が感覚にうろたえる

大阪市 水谷竹荘

痛いところあましましあって老夫婦

西瓜切る庖丁計算して動き

ぬけ道はないかと六法借りて読み

鳥取市 杉谷湖山

洪水の予測か橋を高く架け

貝柱好きだと老いの一轍な

雨宿りしたパチンコのよく当り

京都市 大鶴喜由

妻とつながる一つ一つを考える

かなぐり捨てても女に嘘が残り

父母の見栄とつても遠い幼稚園

尼崎市 小林文月

労音を林の如くシンときき

お好み屋ここにもマダムと言うが居り

奈良県 西辻竹青

じっとこらえて冷静に返事する

愛すればこそその苦言も一寸出し

日曜の勤務はお茶を呑んだだけ



岡山県 福島 鉄児

廿五年敷れ放しでいる平和
洗濯へ邪魔な小さい手を叱り

岡山市 服部 十九平

九人目の所長迎えた生字引
政治家にだけはなるなど遺書に書き

兵庫県 若林 草右

折れ畳みたんだ時に又も降り
猿に似た初孫の顔見て帰り

お灸でもすえときなきいと見離す気

熊本市 有働 菜春

高校を出た教え子にひやかされ
原稿紙懸賞金へ買うて見る

広島市 山田 季賛

ゴム長で出れば午后から雨は止み

大阪市 山本 葉光

対立を超越をして樹樹伸びる
薄情にあらずそこまで気がつかず

倉敷市 水谷 谷水

岡山時間やないでと幹事こうるさし
里心だしたら奴につねられた

自称正義派超然として左遷され

岡山県 田村 藤波

浪人の名も返えされず春の逝き
誠になって一年社宅をまだ退かず

岡山県 岡田 夜潮

ところてん突くよに産んで皆育ち
詰めよられても耳糞掘っており

大阪市 稲葉 鳩花

すねてみる事も教えて嫁に出し
口髭がじゃまになってる職探し
雑談へ課長のせきが通り抜け

「キッスしただけなの」ママはあわてたり

茨木市 下山 清潮

東尋坊死ぬならおいでと云うかたち
永平寺除夜よりよい音打鳴らし

岡山県 本田 恵二郎

仲人を頼まれるほど薄うなり
御理解があつて社長の始球式

仲人が美男過ぎて困るなり

京都市 松川 杜的

抜き切れぬ白髪へ夕陽まともなり

肩叩き合えば子供に笑われる
倉庫課長の拜命当座眠られず

中折れのソフト似合えば停年さ
終電に近くなんばにいい女

地下足袋のまままで明治の土方死に

川西市 竹内 圭三

養子から養子がよいとすすめられ
誘惑に負ける度胸を持っていず

家計簿の横であくびをしかられる

尼崎市 藤井 春日

顔ぶれは一票呈す気にならず
出社してまずかと親御から電話

シャツ一枚買うにも妻の許可が要り

白髪生えてからもかつぎやめられず

岡山市 津田 表太楼

全国区汚職の顔を持ち廻り
小鼓を灸る火桶の高蒔絵

堺市 高崎 雄声

孝行の端くれ母の爪をきり
胡瓜もみ初夏の味覚をささむ妻

ちよっとした幸運の席があき
恐縮は襟を正しただけのこと

鳥取県 藤井 明朗

駅前で待つ労組の裏をかき
創価学会意欲いよいよ恐しい

岡山県 永松 東岸

飲み過ぎて死んで果報な奴にされ
歯を磨き乍ら西瓜をみて廻り

名を変えて易者のいうた運を待ち
お馬鹿さんねと失恋はいたわられ

気前よく酒豪会費を先に出し

倉敷市 野田 素身郎

嫌いな娘とは手をつながない幼稚園
産月の妻の意見に逆わず

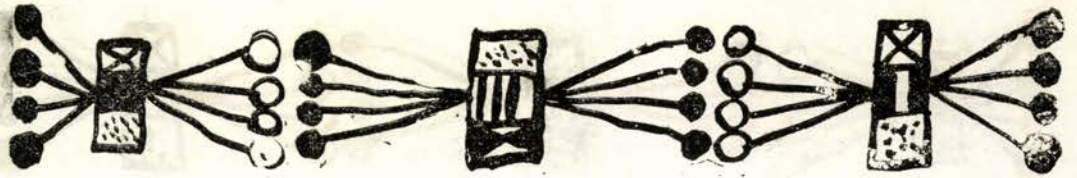
大阪市 伊達 堰子

春なれやげっそり瘦せて猫戻る
場所割のもめを裁きの雨となり

引越しの坂から売った家が見え
政治家の気骨地元で容れられず

大阪市 不二田 一三夫

理解ある夫といわれ敷かれてる



兵庫県 酒井ひか平
元海軍兵曹長の飲みっ振り

荒神さんの座りやはるとこない電化

大阪府 深見雅堂

スト決行平の意見がよく通り

子にもらったネクタイ締める若さ持ち

新世帯一畳半が寝るところ

京都市 松下京一樓

日曜大工ノコも飽も息が切れ

教科書もいっそ漫画であって欲し

宇部市 津秋六花

三味弾ける事さえ田舎傷にする

飲代をポリつけといてやとそれつきり

神戸市 野村初甫

草引へこれも月給のうちと云う

二つずつ揃えて狭き台所

岡山県 池田古心

老夫婦猫と話をするばかり

出て行けに出て行きますがもう八十

東京都 石居高志

不渡りを出してすっかり楽になり

すり切れた袖カパーに似し人生よ

斯うすれば斯くなる酒へ今日も酔い

妬くだけの仕事を女しんどがり

大阪府 早川清生

裏木戸を訪えば食卓見えて初夏

風呂で妓の行儀嘆いて仲居老ゆ

捨てられて舞台が夫などという

故郷から来た嫁庭に葱を植え
未亡人も遺稿の結び聞いていす

当然のようにストまでもってゆき

発つ君へ期待に満ちた目が並び

仏間まで届く朝日に初夏と知り

堺市 辻圭水

反対をして組合員の人気とり

自分から別れて貴方のためですと

滞納はすまない顔をして居らず

加賀市 中松恒雄

鳩ほっぽ歌えと音痴いじめられ

悪評もされる地位まで辿りつき

西宮市 小浜牧人

奥様の余技へ値札がブラ下り

ギブアンドテイクどちらも肚黒し

大阪市 菱田満秋

盗まれて行交う靴が気にかかり

長生きのできん体で遊ばない

兵庫県 前川左文字

デノミネーションの話かいな手内職

夏期斗争こんどは我が家で立場変え

ロバのパンここにも生きる道があり

紋白蝶貧富の塀を差別せず

大阪市 橋高薫風子

遠足の帰りはみんな無口なり

転宅へ親のこころと子のこころ

パトロール若し顎紐かけてくる

下関市 中村九呂平
ふん囲気をこわさず幹事つき廻り

あれつんぼだから笑ってことが済み

奈良市 宮口笛生

児が一人ええわええわで育てて来

さして吞む相手でもなし女中くむ

大阪市 榎本露児

叡山の商魂本堂にあるマイク

大阪市 西川晃

立読の記録保持者がまた来てる

通牒をしっかりと抱いて息絶える

土性骨あって親まで煙たがり

釜ヶ崎風景

仕事して来ると盗人でかけたたり

麻葉呆けたのがにたりにたり来る

食うものも食わずバクチに負けに行く

鳥取県 田中蛙眠子

アイシャドーのひらめき暗い始心見る

葉桜も月も濡れてる散歩道

市場籠世間話しもあるぞでき

名古屋市 野田一念

補償費の出るまで絶対反対し

落選が創価学会へ潜り込み

パンピタン飲んで逢曳出かけたたり

岡山市 林葵丘

株の値がどうのこうのと女客

火葬場の煙がまともに来る団地

神戸市 仲どんたく



百万円くじは拾うて当てるもの

酒飲めばオートメ式にぐちが出る

デスカッション女性の意気のさかんなる

松方コレクシオン

考える人騒音へ群易し

平田市 久家代仕男

答弁と嘘が上手で村のボス

役得の酒へ気使かう阿呆らしさ

肥え汲みにすげなく出来ぬお茶を淹れ

大阪市 本多柳志

P・T・A如何でも米さす役をつけ

銀婚のまだまだ女御しがたく

立候補理路井然とホラを吹き

出雲市 原 独仙

釣り上げたところを撮ろうと思えども

麻雀へサロンパスまで貼って凝り

母アちゃんへの内緒守らぬ女の子

セールスマン名所にも飽き汽車に飽き

お詣りに来てても争う下足順

停年退職

働けと云わず閉居は毒という

大阪市 大谷 月都

表向きは叱って取りなしして臭れる

商用が済めば貫禄負けをする

手に取れば似合うと言うのが気に入らず

税金の事思つて乗り過ごし

岡山市 江 国 幽谷

王手飛車電灯点けるひまもなし

ごほう筆一本出して書かされる

君も日本人だよく真似をするね

岡山 光 好陽子

お人好しが過ぎて歯がゆい男なり

恩給で暮し刺激がほしくなり

西宮市 河相すゝむ

がらくたを一杯もって転居好き

二十年振りの仙台に恩師を訪ねて

病床に気焔をあげる師のすがた

西宮市 野 呂 鶴汀

さりげなく叱つて急所押えとき

老木の影に長々昼寝する

西宮市 樋口 舟遊

箕 面

ラムネ一つ茶店の世辞を滝が消し

新潟県 高野むじな

隣りへの義理も含めて子を叱り

学校長様親展で来たPR

電話口だから笑うて嘘を云い

荷風との情事を自慢する女

高槻市 辻 白溪子

新鮮な感じで店が空いており

お近所の方が遺産に興味持ち

袖カバーたたんで左遷の荷に加え

大阪市 岸 川 漣

次男迄猪口が回つて来た機嫌

恋人の理性淋しい帰り道

くだいなと思ふ或る日のコマーション

大阪市 欄 蘭

日めくりの如く病人やせて行き

堂々と社長の遅刻みとめられ

大阪市 石 倉 旅風

炭坑節うまい兎もいる子沢山

講話きく程の時間も無いくらし

大阪市 魚 住 満潮

子沢山人員点呼して帰り

殺し屋の横顔十代とは悲し

税金の行衛お役所聳え立ち

堺市 田 中 狂二

書きやすい名やと妻共産党を投票

大阪府 林 昌男

福祉課へ行く白粉を薄く塗り

誰も居ないのでコケシにキッスする

靴下をはくの夫を見つめられ

愛媛県 村上 旭童

都会には生理休暇もあるという

十二匹やっぱ豚の鼻をもち

倉吉市 大前 鳴光

貧乏性ハイヤーに泥はねられる

社交術馬鹿にもなつて下を這い

鳥取市 北村 三歩

日歩四銭夢の中まで追つて来る

うらないの様に産婆は逆算し

大阪にて

道訪えば足の先まで見つめられ

神戸市 傍 島 静馬



児の寝顔軽くつついて出勤し

おやじの保険ばかりはいつてどうする気
観光バス今日はいずこで落ちたやら

笠岡市 木山 遠二

読書趣味無い奴に本借り取られ

長生きをして小遣を子にもらい

気分も似 顔も似て来た老夫婦

機械化をしても百姓汗になり

女房に買彼られたまんま老い

大阪市 中谷 ハナ子

青空を仰ぎ西瓜畑を通り抜け

ナイターに仁丹たべと子供云う

大阪市 平 沢 保美

子を叱る声から朝になる我が家

新婚へ二階を貸して若返り

サンダルの素足へ夏がまっしぐら

ポリウムにうれしくラッシュン押されたり

ラッシュンアワー女はしゃべる性サガなりき

布施市 森 下 愛論

下腹が目立って秘書で置いとけず

姫路市 植村 客遊子

饒舌のマダムバトロンと居て静か

十代の意見も入れて普請する

岡山市 宗高 矢寸志

茶の稽古集金人へ取り乱し

夏草が茂り都計は一服し

映画館を出ると孤独が倍になり
妬いているからくどくどと意見をし

大阪市 河井 庸佑

強いのが負ければ八百長だと騒ぎ

新入りと遠慮をすればこき使い

目を見れば何でもわかるとおどかさ

大阪市 小島 さぎす

引越しも夜逃げめいている若さ

旧友の奇禍へ身近かに思う事故

石川県 同村 虹要

欠伸しながらの拍手を見せしめ

面白い顔に生れて飯が食え

ゆうゆうと立読み去りぬメモをして

大阪府 谷 沢 好祐

名を付ける時だけ親の儘になり

サバを読んだ歳へ女給もサバを読み

婦人会からと解らぬ署名する

同舟近詠

松山市 前田 伍健

老妻の鏡へ用は珠数持つ日

花形にされてカメラの言う通り

総おどり下戸あほらしくたち上り

須坂市 高峰 柳児

保険屋もついに頑固へ寄りつかず
落選のせめて若さをいたわられ

言い負けてその上煙草にむせている

末席は飲まず唄わずいつか消え

落選の陽焼けみじめさと変り

反抗に母親口の方も負け

今治市 長野 文庫

象の檻附近で迷子見つけられ

小綺麗に動物園で豚飼われ

耳にした等とほけて意見に来

貫いもの一応値段つけて見る

金がもの云って正論蹴飛ばされ

近眼になってますますあわて者

ラジオ持ち歩き孤独になり切れず

和歌山市 秋月 宏方

灰皿になって戻ったうどん鉢

寝白粉などを忘れてもう久し

駅長の時計は今も紐でよし

姑の目に敷かれてる吾が子なり

直ぐそこと言うに分教場見えす

郭公が啼いてる養老院ひる寝

給料をとる百姓で記事になり

上田市 金子 呑風

飲みたくて来たのだるうに大除掃



誰でも解る川柳

— 解らぬ石原青龍刀

高鷲亞鈍

① 私は川柳論が作品より先行するものとは考えられない。作家は各々の作品以前に理論をもっている信じられるからだ。其故に私の詩川柳は何も新しい川柳理論を樹立し、現代川柳を革新しようなどと気負って言っているものではない。それでは、どんな川柳が詩川柳であるかと、ある柳友が私に質したので、言下に答えた。「君達が、これや佳いと感動した川柳が詩川柳さ。」

誰が観ても、誰が読んでも良いものは良いし、うまいものはうまいと考えるまえに、その「誰が」と「十人」が文学意識を持つ者に限定されてのみ、その句の批評は成立するのである。文学意識などと私はうっかり言ってしまったが、少くとも古川柳とはどんなものか、現代川柳とはどんなものかの知識を持ち、古川柳とは庶民の言葉で記録する十七文字（一呼吸）の散文句であり、現代川柳とは、その庶民の言葉を記録する十七文字散文句の中に詩を盛り込むものである。ということを知っている「誰か」であり「十人」でなければならぬ。

② 詩を盛り込むなんていうが、一休詩とは何だと詰問されるかも知れない。六ヶしい問題である。私は実はこの問題のために、会社をしくじり、家族と離反し、尚白髪余生に流離の生活を敢てしていると言ってもよいが、最近、柳誌

ったものである。抒情詩から劇詩、叙事詩と散文化し、現代の小説ジャンルが確立されたのであるから、詩（抒情詩）は小説（叙事詩）と対象される。そして韻文は散文と対象されるものなのである。

③ 詩と韻文と同義語にみる過誤を冒している川柳家がうしようじょ言っていて、川柳も詩だから、と仰言って川柳詩だと提唱する。私はこの川柳詩という言葉の概念に誤謬のあることを機会のある毎に究明してきたことは、昨年来の私の川柳論を御高説願った読者ならよく御存知のことと思う。否、私が「川柳詩」提唱論者には親の仇の如く、口穢きまで叩きつけ、二十年程まえから詩川柳という言葉で概念規定づけるのに大董でさえあった。

④ ここに現代川柳界の柳論家の第一人者として自他共に許している石原青龍刀が、某柳誌の四月号で「十七音字の綴方と角の無い牛」という変チクリンな題目すら非論理的であるうえに、ますます怪しげな言辞を弄して我が「川柳雑誌」と路郎師を中傷しているのを私は読んだ。抹殺するつもりでいたが、「川柳雑誌」の読者諸賢は兎も角、物わりの悪い他の同人雑誌の読者の誤解もあることだから、一応釈明しておきたいと思う。彼青龍刀は曰う、

「川柳は人間陶冶の詩である」と既定（規定の誤り）する麻生路郎の「川柳雑誌」作品も、高鷲亞鈍の独善的放語によれば、「最高の川柳詩」だそうだが、これも「標榜」だけに止まり、実質的には「伝統派」の一翼である……当

の路郎すら、かつての非伝統的な作品を忘れ去ったかのように既成川柳一辺倒であるし、その推称する「新川柳鑑賞」における作品も「新川柳」とはただ「古川柳でない」という意味しかもない。（傍点筆者）

以上原文を引用したが、私はかつて路郎師の句風が、「酒とろ」によって柳界へ投げたロマンチズムの樹立を、芭蕉が談林風から「枯枝に鳥」句によって蕉風をうち立てたのに匹敵し、短歌の鉄幹、俳句の子規に並んで、今こそ古川柳を質的に変革せしめた路郎師を称え、路郎師の作品を裏づけるための詩川柳理論を展開してはきた。単なる独善的放語ではなく、既に私の「詩川柳理論」は五〇〇枚の草稿になって今秋にも一冊の論文集を上梓しようと思案に考えてもいる。その私にとって唯一の詩川柳作家の総師路郎師が、精選を重ねた「新川柳鑑賞」の作品がただ「古川柳でない」という意味しかもたないなら、それはそれで可いのではないか。久良伎、劍花坊が古川柳に対して新川柳と唱えた「新川柳」と路郎師の思考

する「新川柳」とは全然異質なものであって、それは私が何遍も繰りかえして述べている通りである。

尚「新川柳鑑賞」の字面の解釈は新しい「川柳鑑賞」とも新句の「川柳鑑賞」ともれ、あながち「新川柳」の鑑賞とばかり解するのには青竜刀の独断である。

私は「川柳雑誌」の柳友から、重鈍は口が悪いと、寧ろ敬遠されるぐらいに「川柳雑誌」の在り方や会員の作品を内部から、又大っぴらにやつつけて最高の雑誌とも、最高の川柳詩とも「独善的放語」を吐いた覚えは未だかつてないこともお伝えして置く。殊に私が川柳詩という筈のものでないことは先に述べた。

察するに先に大村沙華氏の「現代川柳批判」を反駁した私の「漢薬論とベニシリン論」の挿りかえしも考えられぬではないが、「人民川柳」の人々は兎角いろいろと分類癖があつて、伝統派がどうの、既成川柳がどうの、革新派がどうのと掲げつらうが、徒らに罵詈雑言をはいまにし、理論として筋が通っていない。特に石原青竜刀の無茶苦茶な柳論を、その辺の小きな柳誌があつたが、つて寄稿を受けているのを私は読むが、これは柳界を毒する唯々しき問題である。

⑤ ころみに彼の口から出鱈目に吐き出る言葉を手挙げてみると、

「十七音(字)の綴り方」とは伝統派川柳の私川柳をヤユしたものであるらしく「天馬」のボエジ川柳を革新川柳とみだてて、角のない牛と比喩し、いっせ牛を馬にのり換えるのが革新川柳だという。つまり「角をためて牛を殺す」古謠から思いついて、ボエジ川柳を角。民族の伝統としての川柳を牛に例えてのややこしいコジツケ論法はシユウルリアリズム以上に難解というよりも不可解である。最後に、

——牛の特色は角である。その角をいかに改良進化させるかが問題であり、希望である。——(傍点筆者)

と己が人民川柳の行方言っているかのようであるが、実に可笑しい。彼は牛と角と別個のジャンルに見ているのだろうか。

私は考える。牛の特色は牛の角である。鹿の特色は鹿の角であり、鬼の特色は鬼の角であるように、牛の特色が角だとするならば、鹿も鬼も嫉妬深い山の神まで角を出して怒り出そう。角は牛だけに限らないからだ。

しかも本来の牛それ自体のボディを改良進化せずして、角だけの改良進化が出来るだろうか。果して牛の角へ接木のように鹿の角をくっつけて改良進化することを青竜刀は本気で希望しているのだろうか。まるで正気の沙汰とは云えないのである。

⑥

曾ての川柳非論者が、文学を口にするれば、とたんに川柳詩論者になつた豹変は何を意味するかと言ふと、川柳の本質をもともと把握せず、詩とか文学に關するアイマイな知識しか持たないからである。青竜刀は場所を代えて、今度復元した「せんば」誌四月号に於いて、「川柳性」とその試案を提起した。彼はその論敵をいつても、ボエジ川柳に仮装するもの如く、二言めには河野春三を取上げているが、一体「天馬」のボエジ川柳のどこが恐いのだろうか。

彼は最近、文学青年になつた為か、一歩先んじて走る春三に或る意味の敬意を表しているものの如くさえ見えるのである。彼らがボエジを信奉しても尚川柳を口にしても放そうとしない間は、いつか又川柳本来の姿に戻る時もある、と私は考えるし、ボエジがよし川柳から去つて短詩運動を勃したところで、既に現代詩人が昭和の初期にあつて短詩運動をなしたまま、いまは語り草となつて一顧もしないのを知るとき、凡そ短詩の存在理由が現代に縁遠いかを悟るだろう。

但しはその川柳性に於いて青竜刀の試案も困つたものであつた。彼は川柳性を形式、表現法、内容、と別け、備者が附されてある。

既に与えられた紙面が尽きるのでいちいち引用はしないが、形式の項で、形式が語られて居らず、表現法に、形式と矛盾し、内容に

於いて独善を敢てして備考で断つて置くといった川柳性で、何が川柳性だか試案だか、私の場合彼の柳論を読むたびに頭が変になつてくる。川柳性とかいう性は人間性といわれるような意味の抽象的な言葉で、人間を具体的に把握することによって人間性(ヒュマニティ)が抽象化される如く、川柳性を語るまに、もつと謙虚になつて、川柳を具体的に捉えなければならぬ。青竜刀の最近の句、「ヒモのたり一つを二つにしてあえぐ」これはヒモを一本を二つにして首吊自殺しそねてあえぐというのかね。「これも「天物」しかしデパートの包み紙」一体天物とは？しかしデパートの包紙がどうしたというのだ。

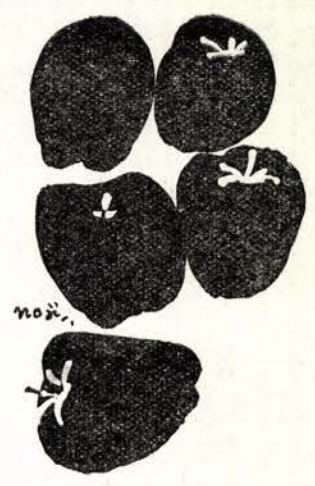
「あえぐもの」と題して十句のうち二句を拾つたが、あと八句ともこの句と似たりよつたりで、さっぱり私には解らず、彼の川柳理論以上に悩まされる理解しがたいもので、こんな川柳が人民川柳であつて、改良進化したものだ。では川柳の本質も解せず、川柳性など、とんでもない。

川柳でも良いものは良い。誰が詠んでも佳句は佳句でなければならぬ。理屈はあとからくつつけていくものだ。

詩川柳たりとも誰にでも理解できなければ佳詩川柳とは言えないのである。

習慣性のない
催眠剤
イソニン錠
12錠 150円・30錠 300円
大日本製薬

句評リレ



兵庫縣 熊本市 京都市 倉敷市 熊本市 熊本市

若本多久志
田垣方大
大鶴喜由
有働菜春
田口麦彦

方大氏提出 (近作柳樽二月号)
勉強せよ勉強せよと放任し

(下)

矢寸志

リズム的に、組合せて少し無理を感じることがあへんも詠んでいるうちに決して無理でない事がわかって来る。時期的に(受験期)ドキッとなる句である。句全体で多忙を売物にして号令ばかりかけている世の親達に耳の痛い句である。

麦彦「掴むとこを掴んだという感じがする。ただ私は「……し」止は余りに投げやりのようで好まない。余りにひびきが強いのでリズムをぶちこわしてしまいかも知れない。

菜春「私は「放任し」でいいと思

う。「放つとかれ」では間がぬけた感じだし、他に言いようがないと思う。親が勉強にかまってやればなお、うるさいことかも知れない。ぬ子供のデリケートな気持ではないかと思う。そして何か反抗している。これもやがこの句によく出ている。(これは視角を子供の方から親の方へ向けての私見)

方大「し」止めの句は難かしいですね。上手に使わないと句が「だいなし」になってしまう。私がこの句を取り上げたのは丁度二女が高校受験勉強を毎晩おそくまでやっています。私もこの句と同じような事を言っている。一本お面を取られたという感じで提出したのです。

喜由「句としてリズムに欠けている、いうなれば蓋げずりのうま

さ、無技巧の技巧とでもいいか。世間の母は毎日これをとこなえているが一向に改まらない。子供は優等生になるより社会の為になる人になつたらいいだろうと逆襲する。せめてサボでも開いて子供と共に勉強する努力があつてもいいと思う。

多久志「然し子供が小学校、中学校ぐらゐは勉強も見てやれるが、高校ともなれば父親でさえおぼつかない現状、ただ「勉強せい、勉強せい」と口やかましく言つて、放任ならぬ実はウロウロしている哀れな親の姿が彷彿と浮んでくるように、調子の悪さも「し」止めも苦にならないと思います。

私の句「出来ぬ子に机の位置を変えてやり」の好一對として推奨したい。

麦彦「たしかに世の親達(私たちを含めて)の盲点をついていると思うのですが、「し」止め私はやはり釈然としません。

菜春「麦彦さん「し」止めにあまり向きになり給うな。でないと「し」止めノイローゼになりますよ。句が生きていれば「し」止めでもいいことにしましょう。麦彦選には「し」止めのタブーが出来ちゃいますよ。「し」止めの句にもいい句が割合に多いのではないかと思います。それよりも「米」止め、「居」止めの句に「プレーキ」かけたいと思います。この句も「放任し」三字で「勉強せよ」のたみ文句が生きている。多久志氏の適評につきると思います。

方大「私は素材の組合せということをよく言いますが、この句をどういじくっても、これより強い調子は出てこない。この場合の「し」止めはまあ無難なうちにはいると思います。

喜由「放任し」のし止めはこの句の場合やむを得ぬとして其他の文字をなんとか推こうしてみたい。多久志「他の文字を推こうするとすれば、少し品格が落ちるが、「せよ」を「せい」としてみたらどうだろう。」

方大氏提出 (川柳塔二月号)

本妻の感的確さも哀れ

谷本

本妻と二号は従来よく詠まれて

暑中御伺

本田恵二朗

児島市下津井三五二

暑中御見舞申上げます
川雑玉造支部一同

川柳雜誌社
篠山支部

- 小西無鬼 酒井ひか平
- 前川左文字 岡沢凡志
- 永尾永断 遠山可住
- 大木枝葉 寺山喜天
- 大江秋月 保西岳詩
- 河原みのる 藤本ゆたか
- 北山越山 大安一風
- 小林文峯 西田初穂
- 小西富士子 畑 小菊

いる句で題材としては新鮮味に乏しいが、素材の組合せが実にうまく無駄なく組合わされている。

最後の「哀れ」がよく効いていて、この文字で夫が今夜も二号郎の方へまわった事が初めて浮びあがって来る。「的確さ」と言う字がもつと平易な表わし方があれば尚よいが、此処はやはり「的確さ」がどんびしゃりである。

例えば「的確さ」を「たしかなもの」と置き換えたすと弱くものになってしまふ。

本能的に女性性は、このようにこゝとに鋭敏と言われるが、敏感さの結果が、面白くない状態では、ヒステリーになるも無理はないだろう。

麦彦—この句は前評のように「哀れ」で活きていると言える。若しこれが「的確さに呆れ」だとしたらその底から人間性の一かけらも拾い出すことが出来ないだろう。「的確さ」もこの場合やむを得ないと見る。

ただ欲を言えば作者がこの句のよくな本妻と二号の関連による見方だけでなしに、何故そういう事態に立ち至ったかというようなこと。つまり男性通有のある種のエゴをみつめるまでに視野を拡げて欲しいと思うのである。

菜春—いい句だなあ。的確さそのものの句で好きだ。動かない充実した十七文字のチームワーク

よ。何をか言わんやです。

喜由—夫婦の俸は貧しさ或いはこれから伸びて行く中でいたわり合う姿でありたい。男というものは金と地位が出来ると悪夫となり勝ちである。僕はこの場合感と勘とをみなさんと考えて見たい、それと哀れと言ってしまう方がいいだろうか、あわれを言わず哀れを出したい、この句から連想すると妻もあわれ子供もあわれひいては家庭も救われぬ、夫の弱点を見つけれらる迄が愛妻家で見つけれたら恐妻家というが二号を置かずとも世の男(何万分の一)は妻とくらべてなつちよらん。

多久志—喜由氏の「感」と「勘」の問題、これは当然、勘でなければならぬ。ある種の事柄に対してのみ女性の勘は非常に鋭敏になる、特に本妻の二号に対する場合は最たるもので、時としては憫情を禁じ得ない。かと言って二号と別れる気にもならないという。男のエゴイズムもチョッピリうかがえるように思えて無難な句でしょう。

菜春—喜由氏の感と勘の概念の違いについての設問であるが、先ずこの句の中の「感」は所謂第六感と解したい。恐らく作者もそのつもりで書かれたものと思う。私は「感」を使った方がこの場合勘としたのより新鮮味が出ていいと思うし、内容的にもびつたりくる

言葉と思う。「勘」という字は、人間の長い間の経験からひらめいてくるものではないかと思う。刑事の勘とか、工芸家の勘とか、その他職人の物を作る時の勘等は「感」とは違ったものと思われる。第六感とは第三次元の世界から人間の心象に突然映じたひらめきではないだろうか。時、場所、経験を超越したものと思う。辞典では混同して書いてあるのがあるが、句の性質に「感」と「勘」で

言葉の組合せで家庭の状態をうまく表現している処を知ってもらいたい。「感」と「勘」は気がつかなかったが「勘」ではないといけなかった。

多久志—女の勘について詠まれた名句は多いがすべて、生活経験—特に女性との凡ゆる交渉をもつたことのある年輩者の作品である、そういう点から考えても「感」説は頂けないのではなからうか。

○ 麦彦氏提出(川柳塔二月号)

引出しの開けっばなしで春になり 香林

日本全国を騒然とならしめたまま、とうとう頓挫した形の警職法を「引出しの開けっばなし」と見た作者の主観、そして下五「春になり」として時間的な経過を表わした手法は正に老練という他はない。

句の底に作者の批判精神が流れているという点で従来の所謂「時事川柳」の皮相的な視方を一歩抜け出ている感じである。

然し乍ら「警職法立往生」という前書きがついているためにこの句が充分理解されたのであり、詠んである内容の高さとは別に、句の独立性という点で全面的に同感出来ない。ここに時事を詠む難しさがあるので、そういった素材を十七音字の詩型の中に盛り込んでなおかつ、文学としての価値を保



川雑倉敷支部

- 田垣方大
- 水谷谷水
- 野田素身郎
- 梶原一善

富士野鞍馬

京都市東山区清水四ノ一七一

川雑淀川支部

大阪市東淀川区十八条町一丁目二一

- 武部香林
- 西森花村
- 武部若菜
- 坂田東洋男
- 志水礼司
- 早川清生
- 岡部三十郎
- 小島さぎす
- 小林文児
- 松下灯子
- 木下尚徳
- 綿谷全信
- 種谷敏明
- 村上和楽
- 木村水堂

これも前句と同じように今日の社会に真向うから立ち向った句であるが「右に持ちかえる」ということばで作者の批判精神と表現が一致して成功している。

時事を詠む場合でも「どこそこ、どんな事件があった」という事実そのものの皮相的な見方なしに「その事件が起きた原因は何か」というような本質的なものをしっかりと擲んで詠みたいものである。

兼春「生きる為の悲しい持ち変え——許されていだろう。「就職戦線」が固くて句にとがりができている。何とかならぬかと思う。

路郎師の「人類は悲しからずや右派と左派」の孫のような句であり、血すじはつながっているけど弱さは残る。

方大「持ちかえる」が効いて、これで人物の性格まで描写している。就職してしまふと赤旗をふりまわすアインなのですが、就職希望者の手段をえらばない真剣味も感ぜられます。

喜由「ちと技巧が過ぎはせぬかと案じられる。生活しつつ思想しつつにはカムフラージュもいる。戦線の文字が無ければ淋しいがあればわずらわしい。

多志「就職試験の時に「どの政党を支持するか」と訊かれると無難な保守党の名を挙げる者が多い」というこの着想は平凡である。

「戦線」も硬い、「就職後」としたらどうか。只「持ちかえる」という表現は新しく、この句を生かしている。

今日日本経済の主流を為す拾教会社の重役の中に、かつて若かりし頃のマルクスボーイが数えきれぬ程おる事の、ほほえましい川柳味を思い出させる。

麦彦「戦線」の語も生硬ですが、そうかといつて、「就職後」では弱いようだが。

兼春「字づらが悪いと思う。目からうける硬さと云ったものがある

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11
●アラントイン配合
●水溶性ラノリン

男性 200円
アストリンゼン

が、就職戦線思想——の漢字の偏在がこの句の損な所だろう。「就職後」にすれば少しはやわらかみが出てくるが、作者の言わんとする所とかけ離れたものになる。生活と思想のギャップをついた句で

はあるが平板である。「就職戦線」という課題吟にしたら、もっという句が出来そうに思える。

方大「これは「就職後」としたら全然意味のちがったものになってしまう。就職してから「右」になるのではなく、就職の手段として一時「右」のような顔をして、ゴールインしようとしているを詠んだものと私は解釈している。又「就職戦線」は能動的な感じであり「就職試験」は受動的な感じになるので「戦線」はいやな言葉であるが、此の場合「戦線」でよいのではなからうか。

多志「なる程「就職後」では、句意も変るし、弱くなりませぬ、然しこれが作者の体験から生れた句なら、人生の悩みも感じられこのまま頂いてもいいのではなからうか。——担当 真鍋一瓢

「ひ」と「ふ」の郷愁

不二田一三夫

読売新聞の読者投稿欄に、俳句も新仮名に改めよという一文がのった。これは当然起るべき問題だともっていたところ、一人の投稿者に対し四人の反論者がそれに筆陣を張って反撃に出た。57歳の人は、万葉集のいくつかの死語が近代語に解され決まされているように、新仮名使いに疑念をいだく人はいないか、後代、旧仮名

使いに復元したときは笑いものにならないか、俳句と短歌は旧仮名で、というのである。37歳の人は、俳句は文語体だから旧仮名使いが自然だと言う。36歳の人は、一時の変化に走る現代仮名使いのみ意をそそいでではない。と、この人は新カナを一時的のものと断定しているようである。

「思ひ族」や「思ふ族」の根は、まだまだ強いようである。ことに女性には「ひ」と「ふ」がお好きである。その書信に文章に、思ひ思ふとは断ち切れないようである。

高二の娘がその学友と宿題かなにかで俳句を作っていた。そばで聞いていると、「そこは思ひではない思ひとするのよ、ここは思ふではなく思ふよ」と旧仮名使いにグロッキーになっていた。参考にして新聞俳壇に罪あり。

岸南柳

大阪市阿倍野区天王寺町五ノ一八 男前製造所

不二田一三夫

川柳雑誌社鳥取支部

鳥取川柳会一同

土井文蝶

大阪市西成区松通九ノ二二

川村好郎

大阪府泉北郡高石町北四六五

伺御中

西いわを

大阪市東住吉区桑津町七ノ二二



枇^び杷^わと百^む足^か

東野 大八

さる家で、見事な枇杷の一皿を出された。西洋枇杷ともいうのだろうか、そのたつぷりと実の乗ったウォームカラーの豪華な饗宴にホッ！とばかり一応感嘆はしてみせた私だが、実のところこの果実は、私の大嫌いな味覚の一つになっている。さりとて勿体ない、と相手への気持も察して心中秘かに舌打ちをしたことだが、さりとてこれだけはどうにも手が出なかった。

考えてみると、私の枇杷がらしいは、どうやら戦争につながらしいのである。ウム、あれからだ、と思いついたことだが、先方様の心尽しに對しおせいれとそのわけが話せるものではない。一口に言つてその原因は、枇杷は私に屍臭を感じせしめるのである。

たその八面れいろうの光頭を眼にするたびに私は心からホッとした解放感を感じたものである。ハゲ頭に悪人はいないの世の話通り、この兵隊は無類の好人物で、どんな辛いことイヤなことがあっても、床の間のほてい様みたいにいづもニコニコしていた。国での商売は八百屋だそうだが、その客ウケのよさがしのばれた。分隊しよその大柄で人気があり、気難しいよその将校でも、彼の頭を一目みただけでニヤリと和んだ顔になる。ハゲちゃんは総じて汗かきが多いが、頭に密着する軍帽はどうも彼には頂けないとみえ、彼は手に暇が出来ると絶えず脱帽してはツルリツルリと汗をふくのが癖だった。彼がやられたもの、一合戦終つてホッと一息のその瞬間にやられたものらしく、思い切り背伸びをした格好で倒れている一方の手の中に、軍帽がにぎられていて、近くのものがかげよったときにはまだ名物の光頭は中天の陽光をさんとはじて生気十分だったという。彼の火葬は、具城の城門の内庭で私たちの中隊の兵隊の手で行なわれた。醜経も花もなかったが、誰がみつめたか、その供物

は青麦の一束と並んだ黄色な枇杷のたわわな一枚だった。彼のダビも終つて、彼の飯盒の中に一掬の熱い骨と化した仏のためのお粥わけて、参列の兵隊たちに米粒かの冷い枇杷の実が配られた。金色の生毛を光らせたその大粒の実を手をうけて、われわれはただなんとなく顔を合せたが、誰一人としてそれを口にすものがないかった。屍臭こめてそこいらに立惑った仏を焼く黄色い煙のそれは象徴とも受取られたからだろうか。爾来、どこへ行つても河南名物の枇杷をついぞ口にしなくなつていた私だが、あれから十五年、戦塵もとつくに過去の思い出の底へふり払つた今も、枇杷をみるとこの始業の深さに思い當つてつい索然となるのである。

枇杷にくらべて生来虫が走るどころか、慄然となるほど怖気が出るのは百足(むかで)である。お釈迦様もこの虫が大嫌いで「お前だけはよそへ行け、決してわしの眼につくところへくるでない」といわれたそう。幼いころにおふくろにきいた話で真偽のほどは講合いかねるが、はじめは慈悲無辺のお釈迦さまだけに、この百足を手にとつて眺められたものだが、その際指に力が入りすぎて不肖のこの虫はついチクリとやってしまった、それが追放の原因だが、よく古いお寺あたりの天井から此奴がポトリとおちると、どうも私にとっては、むかでの奴、をしかめたものである。

こうした悪虫が輪をかけて、私の憎悪の対象となつたのは、鄭州の陸軍病院での出来事である。傷病兵の一人が、或日行方不明になつた。逃亡か自殺か、同じ病室の職友をはじめ、数百人の入院患者は大いに迷惑したことが、行方知れずになつて四日目、くだんの兵隊が病舎裏庭の空井戸の中にいるのがみつかった。その井戸は、背丈ほどのコスモスの群生した、その草いきれの立つ底にあって、容易にみつかるしろものではなかつたのだが、懸命の院内捜査が、文字通り草の根を分けて行われたので判つたことだった。井戸は、地上に幾つかのべた石を周囲に置いて地中深く穴をうがしていったが、その口はさしわたつて一メートルそこそこ、人間の墓穴にびつたりという形。青歯菜が口のあたりから石垣作りの丸井戸の壁を伝つて生え下り、冷たい風が時折地底から湿気をふくんで吹上げてくる。自動車隊用のアセチリンや軽便機械の活動で、一日がかりでやつたことと死体引き上げに成功した。

踏みしだかれて青い草床と化した地上に横たえられたその白い病衣の兵隊は、冷たい穴底にいたためかまだ腐らんせず、むしろ白ろろの様な美しさだった。二十歳ぐらいの志願兵で、病室付の看護婦の話によると、背中の骨に盲貫銃創をうけ日夜激痛に悩まされて長くはない生命だったという。

私は、その兵隊とは一面識もなかつたが、その引揚げ成功の知らせで現場へ馳せつけ、グリーン綱を引っぱつたりした。どうやら上つて横たえられたとき、青白いアセチリン燈の中で、係り看護婦からさき様の話をきくともなく耳を傾けたが、じつと死人の顔を眺めていた。そのときだった。へばりついたらよれよれの軍帽のひさしの下から、ゆっくりと黒い血のりが垂れ下つてくるのをみつけた。あつ血だ、頭でも石角でやられたのにちがいない。そう思った瞬間、その血の滴りは蒼白鼻梁から逆に、そそけだつて高い鼻梁の鼻先へ上りはじめたのだ。おお、といつたのは、すぐ横にいた衛生兵で、いきなり手にしたアセチリン灯をその鼻先へとつきつけた。ギャッ！と叫んだのは看護婦だし、うつとばかりに息をつめたのは私だった。血と思つたのは百足だったのだ。長さ十五センチはあろうかと思われる大きな奴で、たつた今、アメ色のニスをその身体一ぱいに塗りたくつたように、ギラギラとぬめる胴体をきらめかせて鼻を伝う。無数の黄色い足は、ワサワサと音たて動くかの様で、それが強烈な光芒を放つアセチリンの光りの中で思うさまの蠢動であった。ああそこにも、おいこもだ、そういう叫びがやがやあたり

に相ついで。百足は顔だけの一尾ではなく、こめかみに至るところにへばりついていたのである。死人の魂がこの長虫に覺て脳中からわき出した様なサツサツで私は思わずクタクタとなつた。



深草の百夜通い

富士野鞍馬

小野の小町のもとへ、深草の少将が九十九夜通って、雪のため凍死したという伝説は、謡曲になり、唄、物語りに作られて、京都墨染の欣浄寺には、その由緒書に、

「当山は深草大納言義平公の御子四位少将義宣卿の邸地にして弘仁三年三月十六日夜薨去」とあり、所謂小町通いの九十九夜目がその日と思わせるようになってきている。しかしその時に、小町はまだ生れていないのである。

時代のちがう人物を同時に扱った戯曲や伝説はたくさんある。小町と深草少将との時代がちがうといっても、とがめるにはあたらないかも知れないが、吉田兼好も、「徒然草」に

清行が書けりといふ説あれど、高野大師の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小野がさかりなること、その後の事にや、なほおほつかなし」と書いている。

小町は、小野篁の子出羽の郡司義実の娘ということになっていて、それには確証はないが、宮中出仕の女房であったことは間違いないらしい。宮中へ出たのは十三歳からで、仁明帝の皇太子時代のお給仕役采女であったといわれている。歌が上手で、勅選集にも多く入選し、三十六歌仙、六歌仙にも入れられている。その歌とその時の状況から推察して、「穴なし」と伝説されているカタブツでもなく、良岑宗貞(後の遍正)や文屋康秀、小野貞樹、安倍清行、基良親王などと交渉があっただ

ろうと見られ「伊勢物語」には業平とも関係があったように書かれている。

しかし、古川柳では、深草少将の百夜通いの伝説だけに書かれている。

深草少将が思いをよせたのに対し、小町は「百夜お通いになつたら」といったので、百夜通いはじまった。

いい女公卿を百たび歩かせる(傍二)

少将は少し風気も押してゆき(拾四)

もうしめたしめたと九十五六夜目(タル一二五)

少将は毎夜通う度に牛車のシジ(車の長柄をのせる台)にその回数を刻みつけて、百回目を楽しみにしていたが、もう一晩という九十九夜目に、大雪にあつて、ついに凍えて死んでしまったというのである。

突き留めがはずれ少将くやしがり(タル九十)

情ない雪も雪なり九十九夜(〃一二一)

労して功なし深草のゆき倒れ(〃九二)

楽しんで淫せず九十九夜で死に(〃七七)

ほんとうに悲惨な恋であつた。

気強いと気の長いのが九十九夜(拾四)

浮草へ無駄に深草がよいつめ(タル二七)

深草の盛にも濡れぬ花の色(タル七二)

「浮草」「花の色」は小町の歌の文句である。そして、惚れ帳を九十九夜目に消して(タル三)

と、終りを詠んでいる。

また古川柳は「穴なし」の俗説に興味をもって、

そのわけをいわず百夜通えな(万安五)

穴のない女少将たぶらかし(万天五)

味の七-J

モダン 川柳

東 北 丸 大 橋 心

御 門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい

とは知らずあかすの門へ九十九夜(タル一四三)

よし百夜通つたところが始まり(タル六二)

この外多く詠まれている。

小野小町は伝説と歌に残って実際を掴むことは難しいのであるが、最後は奥州をさまよいてそこで果てたという伝説もあり、仁和、寛平の頃(八八五—八九七)六十九歳で亡くなったといわれている。

それから逆算すると、深草少将が死んだ弘仁三年、(八一二)には生れていないことになる。

雅号由来記

新岡回天子

川柳を始めたのが大正十四年、その頃は職謙という雅號であつた。美しいものに迷うのは若い者の當で、美人に迷い、美しい歌に酔う意味であつたが、昭和六年南群日報に「南日柳壇の回顧」を著し、現在の回天子に改名した。自分で何か大きな人生の転機を期待したからである。回天子の偉業という様なものを空想して、その年思い切つて職業も変えた。毎日新聞の販売部で分り別名で、釜山日報やその他へ何かや書きまわした。一昨年本の西日本新聞文壇批評に廻転子となつており、一時の迷ひなる希望も薄く失せて一文女子の廻転子の境におちたかといふ苦衷を察し得なかつた。



近作
柳樽

麻生路郎選
北川春巢選

遺産のないのに奇行は荷風に似て 宇部市 上林 粗影
 アレアレのなめくじはマチス派 同
 慰められて不幸の荷おりたよう 同
 土蔵のシミ当主小兒癡痺のまま 同
 立退きを拒み続ける柿若葉 同
 五月の風を褒め合ってる満員車 同
 貞潔でたち投資で崩れるも寡婦 同
 嘘と嘘かくも楽しきバーの灯よ 豊中市 林 参無子
 長ずれば彼もユダなる親に似て 同
 保守を責む子等若^ク日の我が^アフ^ロワ^{イル} 同
 手術中に一句 同
 ふと掌の汗に気づき痛み和らぎ 同
 パラ切つて貧しき心満ち足りぬ 同
 ビヤガーデン夜空の深く広いこと 同
 看板は野獣になれというスード 熊本 田口 麦彦
 さつそうとゆくデパートの包装紙 同
 小唄習うこれも出世の道とやら 同
 ジキルからハイドにかわるハイヘル 同

トランジスタ肩におとこは飲みまらり 同
 恋失せて聖書のことばよみがえり 同
 十年もかよった道で事故に合い 玉野市 小谷 仙山
 宿題に野球テレビと子は多忙 同
 少しは浮気なさいと信じ切り 同
 十円がキャンデー代になる暑さ 同
 農村へ田植の知らぬ嫁が来る 同
 農繁期大阪弁が風呂をたき 同
 九死に一生得てから邪教に 宇部市 岩原 箔川
 母さんの頭痛お酒のいける客 同
 ラッシニアアワーもう保守党が先にも 同
 役員にしとけば実によく動き 同
 肥かつぐ肩で神輿が今日はゆれ 同
 職場班長ぐらいな選挙に酒がいり 同
 槌音の雑念あるを見抜かれる 笠岡市 出原 真奇
 落第をした子に親がはげまされ 同
 涼み台保守革新の馬が合い 同
 穂も出ないうちから豊作だ豊作だ 同
 午後からは小唄もやれる椅子に付 同
 裏切ら^レとたんあばたに^ニなる^エく^ホ 岸和田市 内藤きさ子
 冷やっことガラスの鉢へ夏が来た 同
 アンモニア承知の上で嗅いだ顔 同
 アンマ屋の女房火箸でたたく肩 同
 六月の雨に短気な人と居る 同
 カクテルも習い飲んべに嫁ぐ気か 愛媛県 横 水泡
 逆戻りする流行を追いたがり 同
 緑遠い姉は勝負な人にされ 同
 盗電をヒューズは叱るように飛び 同

暑中御伺

前田 伍 健	阿部 佐 保 蘭	石 田 沐 天	長 野 井 蛙	戸 倉 普 天	秋 月 宏 方	岡 田 夜 潮	西 森 花 村	横 水 泡	工 藤 甲 吉	川 雜 八 代 支 部	田 村 藤 波
松山市真砂町二一	東京都中野区鷺宮一の八四	大阪府阿倍野区阪南町西二ノ三三	山口県防府市大字西佐波台字幸地一三一六ノ一六	兵庫県氷上郡氷上町小野四三二	和歌山市今福東ノ町二二八	岡山県英田郡美作町北山	大阪市東淀川区三国木町三ノ三一・新三国住宅二号	愛媛県高峯郡壬生川町大曲リ・富士紡木源地社宅	青森市長島三ノ二 東奥日報社編集局内	佐野 卜 占	岡山県英田郡美作町湯郷五五一



- 鏡台に白髪染あり妻の留守 同
- 恋捨てて来た顔はせじハイヒール 大和五生市 尾米 絵見
- ヒビ入った夫婦仲人して直り 同
- 小唄でもさらえたいような回復期 貝塚市 護川 梢月
- パドミントン恋は愉しく汗をかき 同
- おごられる手前メニエーはのまぐち 西宮市 大石 甘美
- 経験は生きてる目分量の味 同
- 面接へ純情かわれた国訛り 愛媛県 大垣たもつ
- 落選の山へもどつさり来た税金 同
- 悲しみも笑いも白き療養所 羽曳野市 水田 帆船
- だんだんと百万円に見えるくじ 同
- 細々と生きる女がよせつけず 西宮市 樋口 寿栄
- 叱られる限界秘書へ打診する 同
- 息してる様な蕪の事故死体 大阪市 木村 文福
- 不機嫌な妻へ甲斐性なしの低姿勢 同
- 嫁き遅れ悟りを開いた顔になり 笠岡市 木山桃仙坊
- 夏の虫特攻隊のように来る 同
- これしきの義理へ善人寝返りし 見島市 伊丹柳瓢子
- 青春の悩みと知った聴診器 同
- 月給を哲着てすねをまだかじり 宇都市 品川 粹歩
- エチケツト自然のままのいい育ち 同
- ヒタヒタとテレビの波が押寄せる 鳥取県 鈴木村諷子
- この辺が俺が死んだら埋めるとこ 同
- 売れ残る気や大学院希望 大阪市 加川 靖真
- パチンコ屋軍歌玉碎せよと鳴る 同
- 無い者の強み福祉へ泣いて行き 貝塚市 千石 快人
- ビジネスの指切りと知らず待ちはい 同
- 金借りの靴の艶を褒められる 須崎市 高橋 蟠蛇
- うかつにも儲け話へ釣り込まれ 同
- 湯婆を左右に梅雨の早産児 芦屋市 里田一ン十
- 長男の惚れる女は年が上 同
- サーカスの猿よりましと思ふ身は 大阪市 吉川 悦子
- 吐いてきたなぞとは云えぬ座屋尻 同
- 景気よく損した話を聞かされる 西宮市 藤田一本歯
- 鯛よりは鯛の膳が落着かせ 同
- 結局は娘の親という弱さ 兵庫県 河原みのる
- 田植どき唯お隣りがおとなりが 同
- 許す気になっても一度叱つとき 大阪府 井上美恵子
- 情熱が冷めて読んだらただの文 同
- 病院の悪口云える程癒り 羽曳野市 中川 利男
- 周旋屋風呂も市場も建つと云い 同
- 美しいだけやと女批判する 兵庫県 遠山 可住
- 実力があり学閥にたたかれる 同
- 自由主義三人ともに売れ残り 笠岡市 高木 桃里
- スピッツは無邪気迎える朝帰り 同
- 迷信のはな緒がわるいとこで切れ 竹原市 杉原 愛鳩
- 媚の目が四十の君子あわてさせ 同
- 盲人の杖にアベック追越され 倉敷市 小倉美音子
- 精農の脱穀機に朝落着けず 同
- 原爆忌揚羽の影が魔物めく 下関市 宮藤 慈雨
- せり市の海より濃ゆき鯖並べ 同
- 当られて安心してるバックミラー 大阪市 今西 生薺
- ない袖は振れぬと白書かいてあり 同
- 勇敢に暴露娼婦の更生記 京都市 当野 哲悟

南海電気鉄道株式会社

川柳部一同

大坂形水

大阪市東区糸屋町
一丁目二

川雑岡山支部

- 津田 麦太楼
- 林 葵丘
- 土井 雷山
- 江国 幽谷
- 光好 陽子
- 宗高 矢寸志
- 浜田 久米雄



責任を上手に繰ればもみ消され
 お化粧の話一座はしんとする 高知市
 手を添えてやつれた頬へさわらさ
 哀れその手だけを握る恋をして
 わが願いはなれてみたいものに慾
 内職と云う灯節穴から洩れる 今治市
 鯉のほり内のが見えるところで刈り
 作業服だから眼につく紅の口 宇部市
 頑固さが夏まで背広キチンと着
 賞めあっているのも恋の美しさ 岡山県
 とめるから危い橋が渡りたし
 飲み癖は乱れ家庭を気にもせず ハワイ
 グラフ線伸びず重役会議持つ 西脇市
 人間ドック一ト月先の予約出来 兵庫県
 看護婦の笑いの中に春匂う 豊中市
 無段でも基だこが出来る目の虫 妻木市
 お揃いで子のない夫婦よく出かけ 西宮市
 がらくたの中から幹事拾いあげ 笠岡市
 愛称で呼べばドライな返事する 宮崎市
 勤評へ校長羽衣欲しくなり 布施市
 ビルの窓鳩仲間にも好き嫌い 河内長野市
 砂時計置いて美容マツサージ 西宮市
 盛り切りの飯に他人を意識する 小松市
 スーツ代浮すつもの妻が株 今治市
 パンルがアクセサリほどの役を持ち 松江市
 濡れて来た第五種便を袖で拭き 浦和市
 末席へ三味も女もみなどられ 松江市
 派手にやるデモヘボーナス胸算用 西宮市

同 須藤 俊江
 同 仲上 蘇水
 同 越智 一水
 同 神田 豊年
 同 横山 一声
 同 宮政 周防
 同 大江 秋月
 同 斎藤たけお
 同 宇田 孝夫
 同 高木繁太郎
 同 山岡 半歩
 同 佐内 隆文
 同 野口卯之助
 同 坂上山椒坊
 同 森本黒天子
 同 青山 町子
 同 筒井 吉枝
 同 越智 義夫
 同 田中 妖人
 同 小池 鯉生
 同 舟木与根一
 同 三上 英路

緑遠く鼻まで加工する焦り 福岡県
 孫の手を土産我が子の伊勢帰り 大阪市
 上司の命令で煙草を買いに行き 大和葛田市
 もう浴衣ぬらして帰った二男坊 西宮市
 袖カバーはずして夏の風を受け 大阪市
 表情ヘライトがまともラブシーン 玉島市
 小役人パリッと着たらふり向かれ 倉吉市
 スタイルの良い娘は立って席譲り 尼崎市
 運動員の数より少い票となり 羽曳野市
 部長昇進今後はもてるという自信 泉大津市
 遅刻せぬJIS規格の顔に逢い 大阪市
 落選へあの人もヒゲ落してい 七尾市
 嫁の荷のアンテナ先に立つ評判 笠岡市
 玄関ヘランドセルだけ帰って居 西脇市
 愛情におぼれきれない不倅 池田市
 死ぬ方が幸福なのに泣いてくれ 西宮市
 これからも一人で暮す気の婦長 大阪市
 元軍人として戦争に反対す 奈良市
 放射能雨いろいろおいと云うと 愛媛県
 起きぬけに昨夕の話念押され 布施市
 四面楚歌固く二人を結びつけ 西宮市
 サア投資などと婦りのパチンコ屋 大阪市
 御無沙汰を詫びて石碑を洗い立て 大阪市
 五月鯉風のない日は一休み 大阪市
 冗談にませて急所をチクリさし 笠岡市
 なるようになるさと五輪招き寄せ 堺市
 戦争を憎み位碑が並んで居 兵庫県
 特売場夫は子等とうしろに居 堺市

阿部たけし
 萬代句念坊
 倉本由起夫
 村上 球絵
 保田 佳峰
 井上 旭峯
 奥谷 弘朗
 竹井 幸蔵
 古田 日南
 高津 徹也
 西木 保夫
 松高 秀峰
 高木 淡柿
 保西 岳詩
 筆坂 町人
 鶴飼 鮎子
 種谷 敏明
 内海 敬太
 竹田 さえ
 竹下 博
 酒井 丹謠
 中西兼治郎
 半田 夏生
 稲森けい女
 谷本鈍愚坊
 武田軍治郎
 常岡 孝風
 金沢 勝美

暑中御伺

河相 すゝむ
 西宮市川東町一〇九
 電話西宮③〇七六七

明和病院

川柳雜誌社支部
 指導 西尾 葉
 支部長 西尾青一路

橋高薫風子 徳永鬼美
 河相すゝむ 野呂鶴汀
 樋口舟遊 酒井丹謠
 塚田東雲 本城弦月
 吉本尊風 中橋川太郎
 網元慧星 富永夢路
 木田留三 寺北さとし
 水谷策平 門永三舟
 樋口寿栄 御園生みほ
 三上笑路 村上球絵
 安田義子 池田文女
 島本 泰 山岡半歩
 事務所 西宮市上鳴尾町一三〇
 電話西宮④一七六七代
 明和病院内

明和川柳研究会

那 谷 光 郎
 石川 荒町四三
 荒町四三

川柳雜誌社

大聖寺支部

加賀市大聖寺水町四八
 野村味平方

金 泥 集

麻 生 葎 乃 選

課題「垣 根」

蔓ばらの垣へ協力する隣り 阿 茶
 垣根越し到来物をとどけ合い 同
 建仁寺垣へ洋館増築し 同
 垣根越し恋のしぐさになる舞台 きさ子
 牛乳がおそい垣根の白いばら 同
 朝顔がやっど垣根へたどりつき 同
 それがこの岩の垣根の中のぞき 梨花
 地上権朽ちた垣根に支えられ 同
 人間はいるのか垣根まだ 続き 若 菜
 昼顔の片手垣根をさぐりあて 同
 友情の垣根を越えず嫁ったひと 奈良子
 父ちゃんにバイバイをする垣根越し 同
 なかたがいてから垣根高う立て 小 石
 垣根越し女ベチャクチャ 小半日 陽 子
 行きとどいた垣根へ敷居高すぎる 葉乙女
 行水の女へ垣根からの声 春 栄
 打水のあまり垣根にみんなやり 知 恵
 垣根越しテレビの見える小住宅 小 菊
 花代子
 梨 里
 美 喜
 美 音 子
 美 喜
 俊 江
 万 女

次の題「手料理」 〆切九月末日



面白いという事

金 井 文 秋

本屋をしていると毎日のように何か面白い本がありませんか、と言ふ質問にぶつかると。この面白いの解釈が随分むつかしい、或る人はユーモアを指しており、或る人は迫力のある内容の事を言っている。その外に悲恋も推理も冒険も、笑いと縁のないものまで、全部面白いの範囲に這入ってしまう。アクセントによってはエロを指しているなどと思う場合もかなりある。

本面白さと言うものは、その人の知能の程度によってそれぞれ感じ方が違うので、いくら本屋をしていてもわかるはずが無いのだが、そんな時にはいつもどんな本を、お読みですかと聞いて見て、それぞれすめるようにしているが、こまるのは頼まれて来て「何んにもわかりませんね」と言ふ人がある。こんな時には全く閉口してしまう。まあいいと思う本を捜して見て下さいと逃げてしまふ。商売気がないわけでは無いんですが、つい

勝手に見て買えと古本屋は座りてな事になってしまふんです。この面白いを川柳的に考えてみましてもいろいろあるでしょうがユーモアのある自然のおかし味と解釈したいですな、その考えのもとに愚言を並べて見ましょう。

私等の子供の時分まだ「ニツカ」と言うものがあつたようです。今の喜劇の前身で滑稽なしくさや馬鹿げた事を言つて人を笑わせていたので。今から考えるとつまらないものでも当時の人々は結構楽しんでいたので、それが時代が進むにつれてだんだん飽かれたし、五郎劇のように自然の人情からくるおかしみが幅を利かすようになって来た、それは当然の事で、狂句のおかしさから脱して川柳のおかしみを貴ぶようになったのに似ているようです。だからと言つておかし味の本準がだんだん進歩して行くとは限らな

い、狂句以前の柳権が今高く評價されているのを見てもわかる事でありませぬ。勿論おかしみだけが価値の標準ではありませぬが、くすぐりの笑いが川柳としての価値がなくなりましたが、自然のおかし味の中には泣き笑いがあります。豆秋氏の句などはその代表的なものでしょう。

川柳雑誌社 婦人友の会

麻生葎乃
 山 川 阿 茶
 中 島 小 石
 中 村 晴
 太 田 良 子
 内 藤 き さ 子
 西 村 梨 里
 武 部 若 菜
 吉 川 悦 子
 藤 村 梨 花
 沢 田 美 喜
 藤 村 〆 女
 高 橋 操 子
 市 場 カ ネ 女
 竹 内 花 代 子

川雑婦人友の会連絡事務所
 大阪市南区二ツ井戸町二三
 山 川 阿 茶

(順不同)



第71回日の誕生日を迎えられた路郎先生

一年一度の夢の柳宴

もえる師弟愛 たぎらす柳魂

川雑 川柳まつり

柳界の最大行事
ここに迎えて第六回

祝賀、会場、網島藤田別邸
「夫婦」
夫婦連れ車中は何も話さない

第五回(33年7月6日)

会場、下寺町光明寺

「仲よし」

これ着ていきと仲よし服を脱ぎ

333川柳会 田中狂二

東京から、石川から、鳥取・

島根・広島からも

石居高志氏(東京都)伊藤茶伝氏(石川県)杉谷湖山氏(鳥取県)藤井明朗氏(島根県)山田季賛・沖本貞敏・高たかしの三氏(広島県)山田静水氏(竹原市)篠山からは前川左文字・水尾水断両氏、大会だけはいつもご出席くださる岩垣日本村氏(大和高田)久しぶりの宮口笛生氏(奈良県)吉原紅月氏(高砂)の顔も見え

きよう快晴の日輪。まぶしい金色のかがやきは柳座に君臨する恩師のすがたとも見えるのである。朝から晴れわたる7月12日は、まためぐりきた川柳まつりの日だ。七月の大阪は愛染さんが祭りのハシリでフィナーレは住吉さんだ。わが川柳さんは日曜日を組みこむために日をきめられないが、先生のお誕生日は七月十日である。

柳趣みなぎる会場

好郎氏の名司会で幕があく。文蝶不朽洞会理事長の力強い開会の辞につづいて生々庵副主幹の挨拶となる。

路郎先生の卓越する名選は名刀の切れ味に通ずると、名刀正宗と妖刀村正のはなしを川柳にむすんで語された。(次号本誌上で発表の予定) 門下を代表して文蝶氏が恩師へ記念品を贈呈。

特別課題「親譲り」発表のまえ、まず先生は、いままでどうり小使いと社長を兼任して大いに働きたいとますますお元気でいた「親譲り」のNO・1は西川晃氏。したがって優勝権は梅志支部

麻生路郎賞受賞作家

第一回(29年7月10日)

会場、下寺町大覚寺

「誕生」

婿にする野心誕生日へ招き

川雑会支部 相原一善

第二回(30年7月10日)

会場、下寺町光明寺

「子沢山」

子沢山使いにやったのを忘れ

川雑大幹局支部 正本水客

第三回(31年7月8日)

会場、下寺町光明寺

「社員」

本店の平へ課長の如才なし

川雑会支部 小西無鬼

第四回(32年7月7日)古稀

川柳放談会

ぶつつけ本番

司会はルーキーのNO・1、橋高薫風子氏である。薫風子氏大阪の七月は祭り、祭り祭でり一色になるのですが、その大阪について何かしゃべってください。

古方「わたしは大阪弁が好きで、学校では講義中も大阪弁でやります。なんて大阪弁を標準語にせなんだかと思えます。昔から京、大阪は帝(みかど)のおわす

暑中御伺

川雑米子支部

松露川柳会

米子市富士見町一三五小西方

衣糠寺ノ内上ル

井ノ下晴芽

井ノ下秀徒

大鶴喜由

田中千潮

田中烏雀

竹松九角

柳本憲一郎

小林亀一

平井絵丘

平岩司郎

本儀親生

川柳雑誌	京都支部	支	部
全 柳本憲一郎	全 田中烏雀	全 井ノ下秀徒	全 井ノ下晴芽
全 小林亀一	全 竹松九角	全 大鶴喜由	全 田中千潮
全 平井絵丘	全 田中烏雀	全 井ノ下秀徒	全 井ノ下晴芽
全 平岩司郎	全 田中烏雀	全 井ノ下秀徒	全 井ノ下晴芽
全 本儀親生	全 田中烏雀	全 井ノ下秀徒	全 井ノ下晴芽

新刊「新川柳鑑賞」好評

都で言葉はひじょうにきれいなのです。
梅里「明治生れのわれわれ年配の者が集まって、昔の大坂弁の「ことば」の研究会のような座談会を毎月やっています、なかなかおもしろいことがあります。通せんぼをすること、ハットウとすると言ったり、半紙のことを「ハンシガミ」と言ったりする。「景色」のことを「ケイシヨクがええ」なんてのがあります。」

郷土史研究家の牧村史陽氏ハダシという瀧(うん)蓄ぶりを披露する梅里氏は、「決心を決める」というような言いなれた事をうっかり句箋に書くもので、よく注意しないといけない」と、川柳講座をちよっぴり。

蕪風子「豆秋さんの句で「アルザロが左ぎつちよで酔いでくれ」というのがありますが、あの句からウチの女房は「右手で女が抱いているから左で酔いだ」と見たのですが。」

豆秋「イヤあれは単なる写生句で、そんなイキなものではありません。(笑)」

蕪風子「梅里さんの「命まで賭けた女」の句、アレは梅里さんの女の人ではないことが雑誌でわかりましたが、私たちは今まで梅里さんのアレだとばかり思いこんでいました。」

梅里「女のこととなると、なんや私の専売特許のようにいわれるが、女の句では潮花さんや竹荘さんがおられる。ムロン登場する女

はそれぞれちがっていますが、私はそんなに女は好きではない。それなのに色っぽい題が出るとみんな私にもってくる、カナロンですよ(笑)

豆秋「私には酒の句が相当にあります。私の三要素とは、酒の色、つまり技巧。酒の香、つまり



千鶴万来の頼もめでたく、「ゼスチユア」出演の諸氏は左から左文字氏、興呂志氏、蕪風氏、中央は「みんな喜んでるぞ」を熱演中の女さん、清子さん、兼乙女さん、司会潮花氏。

品位。酒の味、つまり句の味。こいういったものを川柳と酒にむすびつけています。
蕪風子「ソロンソロ時間がきたよ

は、きょうの二倍みんなが集まりますように。
古方「ええこと言うた。ではみなさん、バイバイ。(手を振る

所作)

梅里「サテ一番おしまい、バイ里。」

兼・席題天位受賞者

(句は40ペリに発表)

- 「夕涼み」 真鍋一瓢
- 「笑い」 吉原紅月
- 「出し振り」 戸田古方
- 「久直し」 長谷川三司
- 「逢びき」 伊藤茶仏
- 「寝顔」 須崎豆秋
- 「左利き」 鉄 捷治

二十傑きまる (同席出席)

- 一位⑦ 堰子・二位⑥ 一三夫・三位⑥ 水堂・四位⑤ 古方・五位⑤ いさむ・六位⑤ 湖山・七位⑤ きさ子・八位⑥ 三司・九位⑤ 葉光・十位⑥ 南宗・十一位④ 与呂志・十二位⑥ 阿茶・十三位④ 清人・十四位④ 紅月・十五位④ 好郎・十六位④ 晃・十七位④ 春葉・十八位④ 捷治・十九位④ 柳安子・二十位④ 武助

祝電感謝

- ナカイキセトオオサカノナツザカン(京都市・布部幸男氏)
- ゴセイカイヲシユクス(等岡市・並木会殿)
- ゴセイカイヲイノル(箕面市・岡島孤舟氏)

余興「ゼスチユア」

まず司会兼行司役の丸尾潮花氏、出場選手を紹介する。女性軍の先鋒藤村メ女さん、中堅川島葉乙女さん、アンカーは酒田清子さん。男性軍は前川左文字、児島与

暑中御見舞申上げます

並木会

木山遠二他十二名
岡山県笠岡市山口

川雑高知支部

大西迷窓

高橋幡蛇

仲どんたく

神戸市灘区高羽橋二〇一

暑中御伺

西尾 栗

大阪市南区西賑町三
電話75五九六三番

会川柳交通局

- 北川 春巢
- 富岡 淡舟
- 浜畑 胡蝶
- 見島 与呂志
- 福島 正則
- 岡島 孤舟
- 森文 夫
- 米虫 一の字
- 藤田 凡々
- 前田 浩
- 草深 醉
- 橋本 雅
- 山口 雅
- 万

呂志、菱田満秋の三氏である。競技に入る前、潮花氏からルールの説明がある。路郎、霞乃両先生の名句四と有名な古句二、あわせて六句がこのゼスチュアの題になるわけで、題である句は、「会場の皆様、題はこれでございます」とNHKもどきの名調子だ。

ジャンケンで男性軍の先攻ときまる。会場のボスターは、よく寝れば寝るとしてのぞく枕敷帳(古句)

この句を左文字氏が舞台の上でゼスチュアする。これを解く女性軍には句を知らせていないので、左文字氏のゼスチュアが唯一のカギとなるわけである。

左文字氏は舞台へゴロリと寝る、そしてやおら立ち上って、蚊帳をめぐって覗くゼスチュアをする。これでこの句を解けというのである。さすがは清水一家の酒田清子さん、「この句なら白柳さんから耳がタコになるほどきかされている」と、まず女性軍に一点もたらず。

次は、みんな飲んでるぞビールが散るぞ夏(路郎)

こんどは女性軍のゼスチュアで男性軍が答えるという趣向である。藤村メ女さんが夏を想像さす汗かくゼスチュアとビールを抜くしぐさをすれば、菱田満秋氏がかんとんに答えて同点となる。

第三問は、十合大丸帯一本にくたびれる(霞乃)

これを人気者児島与呂志氏が演ずるのである。デパートを表現する大きな建物を二つして、帯を結んで見せ、あげくには「ヘナヘナと舞台へ座り込んでくたびれる」を熱演すれば期せずして大方向から拍手の渦だ。

帯とヘナヘナ腰にズバリメ女さんが二点目をあげる。第四問は、雷を真似て腹かけやっつき(古句)

これをゼスチュアするのは万年少女川島葉乙女さんだが、コレはむずかしい、という声が場内からもれる。結局清子さんが答えて女性軍一点リードする。

第五問は、一と握りああ人生は和にしかず(路郎)

満秋氏のゼスチュアを葉乙女さんが答え、いよいよ大詰の第六問は、飲んで欲しやめても欲しい酒をつぎ(霞乃)

演ずるは清子さん、けだし適役中の適役で、「飲んで欲し」から「酒をつぎ」のゼスチュアはご家庭の演技そのままか、実に堂に入ったものである。これは与呂志氏が解き満場の拍手を浴びて大好評裡に幕となる。

カメラ・村山光輪
ペン・不二田一三夫

懇親宴

橘高薫風子

特別課題「親譲り」の披露で最高潮に達した興奮が尾を引いて、川柳まつりの第二部懇親宴は第一部会場でのまま開かれた。北京料理の丸テーブルに路郎主幹ご夫

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック
積水化学
本社 大阪市北区字是町1

にして」。和菜氏の朗詠は路郎主幹の句。「みおつくし鳴ったらババも帰ってや」

この句は出席者全員に配られた団扇に書かれたもの。料理はウズラの卵、鯉、スーブと次々に生まれデザートで終わる。演芸は佳境に入り木堂氏の木曾節、小松園氏の筑前琵琶「湖水渡り」、

葉、文蝶両氏コンビの支那奇術は拍手の嵐。この時、堺岸和田の女性作家のテーブルと西宮支部の若いグループとの間でポテトとビールとを交換したのを筆者は見逃さなかった。和氣霽雲のうちに好郎

梅里御兄弟の透視術、潮花氏の舞踊「黒田節」が続く。氏はアンコールに応え「夕暮」を追加される。正に真打ちの芸である。この間、篠山支部の小西無鬼氏の町会議員当選を祈願する寄せ書に全員筆を執る。最後に路郎主幹の健康を祝福する万歳を三唱、午後八時散会した。

懇親宴出席者
多志志 狂二 貴山 淳水 清瀬 一 藤 百枝 好部 古方 圭水 佐文字 水新 梅里 銀呂志 阿茶 柳志 文秋 小原園 愛 郎 葉 文蝶 いわさ 夜島 小松 生を庵 小石 和菜 薫風子 光輪 寸む 藤子 芳子 和菜 薫風子 小松 寸む 茶依 三河 雄声 良子 武野 男 竹 莊 海峯 藤原 万壽 水宮 保美 春菜 湖山 恒明 聖子 柳志 木堂 香林 若菜 他一名 舟遊 鶴行 青風 月部 敬人 満秋 梅女 静水 たかし 貞敏 幸吉 葵 路 半歩 十哲 博也 愛路 路郎御夫妻 一三夫 安子

懇親宴出席者
若本多志志 丸尾藤花 土井文蝶 戸田古方 正木水宮 佐野白水 帝化川柳会 松田吉 梅里 北川春果 田村好部 西尾菜 中島生 文蝶 大坂形水 藤藤強子 諸氏のほかにも氏名もれの数氏の方々にお断りを御礼を申し上げます

ご寄贈感謝
井野川甲子朗 尾園孝夫
川島葉乙女 佐野白水
谷一平 谷沢好祐
平松繁三 深見雅堂
松下京一 正口辰始
米永耕山

暑中御伺

久家代仕男

島根県平田市灘分町 一八二二

石居高志

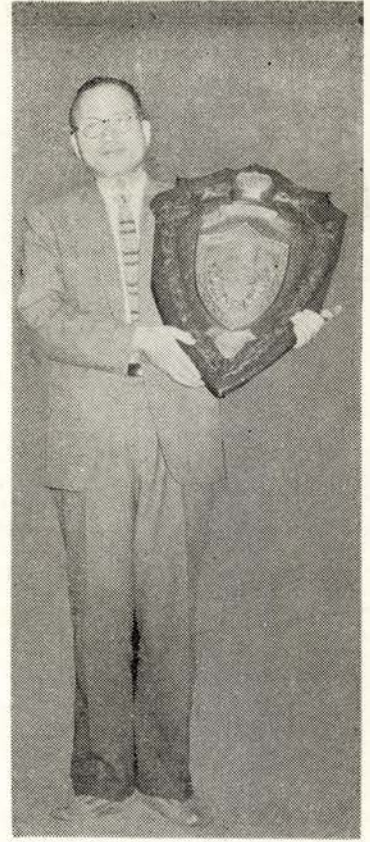
東京都杉並区西高井 戸一ノ八三

局

丸川初甫
辻白溪子
松川杜的
阿方万的
吉原紅月
宮口笛生
植村客遊子
正本水客
田中稲朗
永尾永断
塚脇笑太
都倉求太
堀須賀太

大鉄

帝化川柳会



栄えの大楯を抱いて
川維にしなり支部
西川 晃氏
(村山光輪氏会場で撮影)

麻生路郎賞受賞句決定(1959年度)

特別 課題 親子 入選 発表

親の血が無事な男にしておかず

川維にしなり支部 西川 晃

(二席)

この子もやっぱりフランスへ
ゆきたがり

川維婦人友の会 内藤きさ子

親譲り村の金庫を任される

川維並木会 高木桃李

(佳作)

博士の血受けて机の虫となり

川維阿野野支部 金井文秋

だんだんと父に似て来て父あわて

川維大木支部 梅田久雄

腹の立つ時に気づいた親ゆすり

川維京都支部 布部幸男

入選 発表

親譲りその商才が店を変え

交通局川柳会 児島与呂志

母の血が流れています無姿

333川柳会 田中狂二

憎めない女蕩しも親譲り

本社 山根白星

親譲り親があきれる程に貯め

森林川柳会 中島生々庵

釘一つ打たぬところも親譲り

浜守支部 吉田圭井堂

親譲り将棋も待ったばかりやり

川維にしなり支部 後藤梅志

今ここで嘘が言えない親譲り

川維藤山支部 遠山可佳

親譲りですよと母が尻ほうてくれ

親ゆすり息子も嫁にもう敷かれ
333川柳会 川村好郎

親譲りなのに口下手叱られる
川維婦人友の会 久米奈良子

親譲り人を信じて疑わず
川維淀川支部 木村木堂

親譲りの職機械化にうばわれる
南海電鉄川柳会 辻 圭木

親の子で眼がないですとぐとあけ
森林川柳会 河村瑞川

親譲りきちんと箸は挿んどき
川維鳥取支部 杉谷湖山

音痴まで譲りうけたを妓に云われ
川維西宮支部 末沢友子

親譲り金は無くともこのフアイト
川維西宮支部 傍島静馬

親譲り親より偉くまだなれず
川維西宮支部 菱田満秋

親譲り下駄を運えて帰りがけ
川維西宮支部 藤田一本歯

俺よりも喧嘩早いと父呆れ
川維西宮支部 里田一十

真向から呆れるところも親譲り

川維西宮支部 大石木綿

小心なとこだけ親に貰って生き

本社 丸尾潮花

若い日の夫に似てくる子に悩み

本社 長野井蛙

毒舌が家系のように継がれてい

本社 村山光輪

肩振って歩き先代に生きうつし

川維木次支部 昌

保証人にならぬ固さも親譲り

川維木次支部 景山綾美

親ゆすりの暮らしいやと共稼ぎ

川維木次支部 石川幸夫

親譲りと思えば愉し軒の草

南海川柳会 高寺和郎

親譲りの金鶏勲章売りに出し

南海川柳会 友淵貴山

そっくりの気性で親に反抗し

川維玉造支部 黒岩直人

譲りたくない所許り似て生れ

川維玉造支部 西田柳宏子

親ゆすり養子で担う家台骨

川維玉造支部 平井井平

角帽を脱いで間もなく社長補佐

川維玉造支部 渡辺勝一

親譲り金の成る木は既に枯れ

川維藤山支部 酒井ひか平

親譲りの気性課長の気に召さず

川維藤山支部 大江秋月

親ゆすり山は他人の名で茂り

川維藤山支部 大木枝葉

しぶちんと云われ暖簾を守り抜き

川維名古屋支部 野田一念

親ゆすり今に残る餅の白

川維名古屋支部 服部随田

葉参り父祖三代の夏羽織

川維宇部支部 上杉青山

親譲り三反五畝の城は出ず

川柳雑誌社

にしなり支部

長野 文庫

今治市神明町

月原 宵明

今治市泉川通一七八

竹原 川柳会

広島県豊田郡竹原町

土井 文蝶

吾郷 玲人

本多 柳志

魚住 満潮

石倉 旅風

岸川 漣

欄多 清人

本沢 保美

中田 五色

井石 悟朗

麻生 利幸

宮原 敏子

岡田 歌子

後藤 慎太郎

西川 梅晃

後藤 梅志

大阪市西成区玉出新町通
一の一

川柳支部支店 岩原信川
親ゆずりの夢餅笑いも飯につき

川柳支部支店 田中千鶴
親ゆずりどのきょうだも素の気なし

川柳支部支店 杉原ひろみ
宵越しの金を持たぬも親ゆずり

川柳支部支店 小田〇女
次男まで右総代も親譲り

川柳支部支店 千石快人
強意見出来ぬ浮気は親譲り

川柳支部支店 光好陽子
親譲りの家税金にみなとられ

川柳支部支店 江国幽谷
立候補しようてたまらん親譲り

川柳支部支店 小池しげお
兄弟の屑へ百姓譲られる

川柳支部支店 谷本純愚坊
父さんもそうだったよと子をさとし

川柳支部支店 道券茶の香
親譲りの酒乱へ老母二度つかえ

川柳支部支店 佐野白水
ヒスだけは人後に落ちぬ親譲り

川柳支部支店 罔尼憲坊
親譲りの美貌を親が不安がり

川柳支部支店 深見雅堂
呑ん平のニックネームも親譲り

川柳支部支店 伊藤茶仏
すぐ妻が闘志をわかす親譲り

川柳支部支店 前田義風
低姿勢これも三代親譲り

川柳支部支店 藤岡時芽
奥さんも親譲りとかで少し飲め

川柳支部支店 春名香春
御落胤も異性の事でよくもめる

川柳支部支店 田垣方大
親譲りやっぱり爪に灯をともし

川柳支部支店 野々口美舟
亡妻をしのばすような娘の仕事

川柳支部支店 山口静湖
初舞台親から受けたすじの良き

川柳支部支店 山本朱紅
親ゆずり杉の木立にする感謝

川柳支部支店 高松房子
新緑に埋まる土蔵は親ゆずり

川柳支部支店 尼 緑之助
健啖のその歯並びも親譲り

川柳支部支店 金泉万葉
親譲りの轡近所から親しまれ

川柳支部支店 野木三又路
指をする癖だが抜けぬ親ゆずり

川柳支部支店 平田越舟
親譲りの内気が母の気に入らず

川柳支部支店 本城弦月
世話好きは親譲りだと褒められる

川柳支部支店 内永三舟
仕来りも暖簾の色と共に裸せ

川柳支部支店 橋本裕邦
義理固く女に甘い親譲り

川柳支部支店 小西雄々
親譲りの財産減しもせずに死に

川柳支部支店 北川春巢
親からの変屈だっせと親生まれ

川柳支部支店 西村梨里
親譲り酒の苦芳が続く母

川柳支部支店 久米奈良子
貧乏を気にせず生きる親ゆずり

川柳支部支店 綿谷全信
親譲り社長の椅子のこそばゆし

川柳支部支店 小島さきす
李ラインへ血が湧きあがる親譲り

川柳支部支店 石川侃流洞
親の子と言わしておける程たまり

川柳支部支店 正本水客
甲斐性のない極道も親譲り

川柳支部支店 宮口笛生
親譲り本場の唄に声が枯れ

川柳支部支店 辻 白溪子
親譲り心配させる社交振り

川柳支部支店 平岩司郎
参ったとなかなか言わぬ親譲り

川柳支部支店 杉前南宗
親譲りの畑も田圃も無事な秋

川柳支部支店 山本東郎
親譲りの田圃レベルにチョン切られ

川柳支部支店 谷沢好祐
親譲り男であつたらなと思ひ

川柳支部支店 小川恒明
親譲り釘もまともによつ打たず

川柳支部支店 須崎豆秋
愚痴一つ言わぬ死が親ゆずり

川柳支部支店 吉田圭井堂
親譲り守備するだけにやっこさ

川柳支部支店 中田五色
親ゆずりやないかと我が子負けていす

川柳支部支店 岸川 漣
どことなくおっとりしてる親譲り

川柳支部支店 野村味平
女の子の方が父親の才を継ぎ

川柳支部支店 永松東岸
親譲りという不器用を大目に見

川柳支部支店 三村柳風子
親ゆずり二男三男お元氣

川柳支部支店 橋原竜泉
親譲りそれも一ベン拗ねる癖

川柳支部支店 市場没食子
麻生路郎

「親譲り」の選後に

麻生路郎

特別課題の応募は年々殖える。殊に本年からは誰れでも応募出来る規定に改められたので更に拍車をかけた応募殺到ぶりだった。

優秀句がかなり沢山あったのはうれしかった。慎重に選を行なった結果、別稿発表の通りの成績を見た。麻生路郎賞の受賞句は川柳にしたり支店の西川晃氏の作品で血というものの無気味さを思わせられた。比較的柳歴の浅い晃氏が巨豪を圧して優勝の栄冠を担われたのも精進のたまものであろう。第二席の内藤さき子さんの句は軽妙そのものであるし、第三席の高木桃里氏の作品は親譲りの重厚な人物を思わずに充分である。その他の作品に於いても味うべき句が多かったことをつけ加えておく。

優勝楯を

手にして

西川 晃

今日の私の入選句については、かねてより密かに自負するところ無きにしもあらずでしたが、まさか一席に抜けようとは夢にも思っではいけませんでした。

何とか一本ヒットぐらいは打てるだらうと期待していたのが、意外にも決勝大ホームーになったわけで、余りの僥倖にただ茫然としている状態です。此の光栄を機会に、私の川柳も現在の段階より一步でも前進せねばならぬと固く心に誓って居ります。

どうか今後共、先輩諸兄姉の御指導御鞭撻を御願いたします。汗穢(あせ)わし優勝楯を握る掌の(七月十二日 川柳まつり会場にて)

須崎豆秋 大阪市阿倍野区旭町三丁目一四番地

・暑中御伺・ (ABC順)

伊達 堰子
不二田 一三夫
今西 生薑
金井 文秋
加藤 繁雄
河井 庸佑
木口 賀峰
木村 十悟
菊沢 小松園
松江 梅里
小川 恒明
新川 博也
須崎 豆秋
高鷲 亜鈍
辻川 喜仙
山本 葉光

支 部 野 倍 阿 社 誌 柳 川
事務所 大阪市阿倍野区旭町2の110電64.2082 (木村十悟方)

平 田 越 舟
広島県安芸郡船越町三三五

目標の相違

— 兎と龜の話



川村好郎

兎と龜の駢競べ——私等が幼い時から度々聞かれたお伽話である。油断大敵ということを教えられた。この話の作者は皮肉にも動物のうち最も足の速い兎と最も遅い龜とを競走させ最も速い兎を惨敗させたのである。この寓話は唯油断大敵ということだけで済ませぬもっと深い味のある話として考えてみたいのである。

この兎と龜は何回競走をやり直しても必ず兎が負け龜が勝つのである。何とならば目的がちがいで目標が異っている兎は山の頂上に達するということよりも龜に勝つことである。常に龜を目標にして走っているのである。スタートを切ったが兎はただ振りかえり振りかえり龜を見ていたのである。足は頂上に向いていても心は龜に向って走っていたのである。龜の余りに遅々として鈍いのに驚いた。少しも動いていないような龜の匍うているような足どりに龜を侮辱すると共に己を嘲笑したくなった。龜を相手として懸命に走った自分が馬鹿らしくなり遂に昏々として眠る兎となったのである。

兎は決して兎に勝つことだけが

目的でなかった。山の頂上に達することが目的であった。故に如何に兎が豪駄天の如く走り去っても決して意気消沈も憊怠も苦悶も狂走もしなかった。龜ははかどらぬ鈍い四足に全力を注ぎ一步一步着実にただ頂上へ頂上へと走ったのである。兎は全霊を尽していない龜をながめ、加減して走っているのである。この目標目的を変えぬ以上はこの勝負は何回繰返しても龜の勝利である。

この話を我々の人生に就て考えて見たい。人間には兎も兎も鶏もはたまたま蚯蚓もいる。兎と龜の競走ならば申合せて中止することも出来るが人生は生れた以上既にスタートは切られ走らざるを得ぬ必然の運命を負わされているのである。生活能力に自信あるものも、無きものも。果して兎の生活態度だろうか。龜の勝利よりも生きる喜びに己を尽す態度だろうか。卓越せる商才敏腕ありとて驕慢油断あるべからず。鈍才不遇なりとも卑屈落胆あるべからずただ頂上へ頂上へ兎は兎として龜は龜としてその生を喜び倦まず一步一步歩きである。

川柳に精進する私等に於いてもこの兎と龜とを考えてみたい。数年前、私の勤めている会社の従業員によって333川柳会を設け及ばずながら私たちがその指導に当たって来た。田中狂二君もその会員の一人である。初心者ばかりの会員の中で田中狂二君はいつも全没組であった。その度に私は彼を励まし或は褒め或は慰め作句をつづけてくれることを願した。他の会員の中には相当器用に作句するものもあつたが三年四年と経つうちに川柳とは大体こんなものかと早合点するものも。中だるみのもの。脱退するものも出来た。その中で狂二君は創立以来一回も流会のない句会へ必ず出席し、本社句会は勿論、南海川柳会其他へも出席し、黙々と一歩々々龜の匍行をつづけその中に川柳の味、よこびを味い懸命に走った。その努力は遂に昨年の川柳まつりの特別課題「仲よし」にあらわれた。これ着ていきと仲よし服を着

旅らしい音で柳に傘がふれ
水客 笹の葉の風へめだかがつき
まとい 柴香
どこへ行く水かつつじの色
潮花
これ等は私の到底作り得ぬ詩情豊かな名句である。柳、笹、つじ等私には作つことがない。強いて水客流に作れば没になる。附焼刃の句であり龜が兎の耳をつけ足を付けたに過ぎず。私はどこまでも俗気のある
春雨へ女房と濡れるあほらしさ
桜なら堺刑務所いま見頃
である。これなら抜いてもらえ
る。兎は兎、龜は龜の個性があり行く道がある。水客氏は川柳のひき出しと評せられる程句材が豊富であり、作句も早い。私は安価な机でひき出しがない有つても中々開かない。やっとな開いても紙屑ばかりしか入ってない。龜ではない蚯蚓にも等しい鈍さであるが匍いつづけている。

十年程前私は社用で東京に数年暮したことがあり川維東京支部を創った。その時業界の週刊新聞に川柳欄があつて私は試みに投句した。人が多かつたので私は大体初心者も秀句で抜けて煙草など景品を貰いいい気になつて居った。ところがどうして分つたのか或日、その新聞記者が事務所へ訪ねて来てあなたは川柳雑誌の不朽洞会員じゃありませんか人が悪い、是非今後

<p>川柳雑誌社ハワイ支部</p> <p>ウイロー社</p> <p>同人一同</p>	<p>川維出雲支部</p> <p>尼 緑 之 助</p> <p>出雲市高松</p>	<p>木村千容</p> <p>倉敷市新川町</p> <p>千巻番地</p>	<p>大阪通信病院</p> <p>烏ヶ辻川柳会</p> <p>(イロハ順)</p> <p>池戸 桃村 若林草石 市場 漫食子 仲合ハナ子 生越 正徳 樹木露児 乾 静夫 真野康彦 橋本 幸男 小沢史兼 半田 夏生 足立春雄 長谷川 屯風 木村喜男 西口 弘 北川春男 西辻 竹青 水谷竹莊 尾崎 方正 森下愛論 小野 才凡平</p>
--	---	---------------------------------------	--

はあなたが選をしてくれと頼まれた。そこで早速路郎先生にその由を伝えお許しを頂いた。その時の先生の御手紙に選者になって初心の方に川柳を教える事は結構だ。まだ川柳とはどんなものかわからぬ人の選ばかりしている君の句が次第に荒れて手が下ってくるからそこを注意して自分自身の勉強を忘れぬように、と教えられた。私はこの先生の御言葉を未だ忘れずに胸に刻んでいる。

最近羽曳野病院へ先生の御命にて川柳を、療養していられる人々と勉強する為に月一回出席している。先生に羽曳野川柳会の御希望もあるので没の句をなぜ没になつたか、添削を主として指導してゆきますと話したところ、先生は余りにこにこもさえずに仰云った。

没句を添削し説明することも悪くはないが悪い句を少々添削しても大した句にはならないし、それはかりやっていたは句は上達しない。添削と共に必ず名句佳句を示し、川柳とはこれだと教え短評も加え作句のよい燈明を示し指導せねばならない。と同時に君も選がすめば必ず後で「川柳塔」「私等」など名句を読んでおく事を忘れぬようにと教えられた。

私は決して足の速い鬼ではないが亀ばかり見て走るなと戒められたのである。

更に私は鬼と亀の童話を味いた。過日私は某理髪店へ散髪に行つた。皮肉にも私の隣には髪の毛の

房々を通り越して石川五右衛門の孫かと思う程の盛り上った髪の毛の持主の青年が散髪をしてもらっている。鏡にうつる私の髪の毛と貧弱なことよ。隣の刈つて落ちる一束の髪だけでも私の頭に植えられたらと落胆せざるを得ぬさびしさである。

散髪屋のおやじは隣の五右衛門には実にその刈り方が荒々しい刷子でふけを実に乱暴に落とし、石鹼水を多量に振りかけて両手で掻きまわするように洗っている。私の方はどうか、散髪屋のおやじはとも丁寧にかの一本も落さじと夜店のステッキよろしく揃えてくれる。刷毛もただサラサラと撫ぜる程度ですぐやめてしまふ。

散髪屋痛々しそくに分けてくれと誓って作つたことがあるが全くその通りである。さて仕上つてしまえば五右衛門も一八〇円である。方法はちがつていても五右衛門は五右衛門として夜店のステッキはステッキとして仕上げる努力は同じである。鏡でみる私の髪は「まんざら捨てたものでない」と自惚れたくなる程の出来栄である。五右衛門と全くちがつた晴れ頭である。

理髪師はその人々に応じてその髪の毛の多少を生かす所に腕があるのだ、若し私の頭を五右衛門式に刷毛を使つたら私の髪の毛はたちまち一本も無くなつてしまふであらう。

我が路郎先生は門下の句を決して十束一からげに選はされない。その人に応じ個性を生かし特性を

申し鬼は鬼、亀は亀として育成し指導して下さっているのである。正に立派な腕の立つ散髪屋のおやじである。

我々はこの師を仰ぎ導かれ鬼は鬼として亀は亀として頂上をめざし一路邁進せねばならない。頂上とは何か。「生命ある句を創れ」である。

弟と卵

杉本一鶴

手術日まであとわずか五日を残すのみとなつた日曜日、体温川柳会のメンバーから一人でも多く今年の川柳まつりへ投句してもらおうべく柳友を励まして居る処へ、私に見舞客が来て居るからとの連絡があり、話もそこそこにして吾が部屋に戻つてみれば末っ子の弟がポツンと立って居る。

外科病棟へ来てからは転々と部屋をかわり母でさえどじを踏む事もあるのにわずか十才で甘えん坊の弟の照夫が一人で来るとは思いもよらぬ事だつた。

百匁ばかりの卵が机の上に置いてあるので、「誰がその卵を持って行けと云うたんや」「誰も云えへん、僕途中で買つて来たんや」「ほんまか、お金どうしたん、そんな金あることないやないか」と聞けばしばらく黙つて居たが「僕毎日貯めて買ったんや」と云われ

た時、目頭のアつくなるのを押えきれず、こんな小さな弟にまで心配をさせて居るのかと思うと只濟なまで胸がつまる。

私が入院するときはまだ乳呑児だつた弟がもうこんなうれい事を云える年になる程、闘病生活をおくる臍甲斐なき、歳月の流れをまさまじと教えられる。しかしこの弟の無心な便りが私の心をどれだけ勇気付けた事でしょう。悪条件と云われ乍らも数日後に手術台へのぞむ私には何物にも替えがたい力を付けてくれたような気がします。

希望の灯いま一息の手術台

(25ページから)

おかし味の中には、笑い事ではないものもあるし、おもわずには笑むものもあるでしょう。念の為笑いと言ふ字の熟語がなんぼあるかと調べて見ましたら、大笑、哄笑、含笑、苦笑、嘲笑、などよくなじみのある笑いから笑納、笑覧と言ふような儀礼的なものまで、なんと八十余もあつたのには全く驚きました。

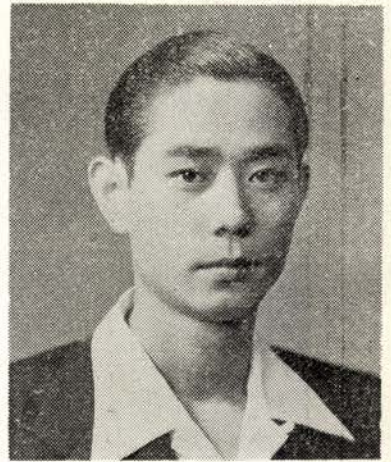
初めに戻りますが面白いと感じるのは、やはりその人の智能の程度が大いに左右しますね、それに趣味が加わります。川柳家は川柳を読む且つ作っているのが一ばん面白いようです。その面白さも他の文芸に見られない自然のおかしみが、われわれを虜(とりこ)にしているのでしょう、川柳家諸君よ大いに楽しみ、大いに頑張らうではありませんか。

ルノー、ダツトサン、トヨペット部分品販売

日野ヂーゼル純正部分品

東光自動車工業株式會社

大阪市上福島南一丁目一六
電話大阪 5558番(代表)



慈観院真誠幽王居士

(昭和34.7.3.死亡)

両親を、そして愛児をうしない、こんどは自らが愛妻を遺して37才の生涯を閉ずる。

(大正12.7.6.大阪帝塚山で生れる)

春秋に富む 幽王逝く

昭和34年7月3日午後11時、心臓マヒで三十七才という若さで幽王木下誠治氏は呼べどもうふり向かぬ人となった。

遺句にもみられるように、異色作家として路郎門下の逸材であり、また住吉たいこ橋のお好み焼きの店主として広く知られていただけにその急逝はまことに痛惜にたえぬものがある。

住吉さんのことしの桜が散りかけたころ、路郎先生は幽王氏を訪ねられたことがあった。「最近の作品が、あまりにもさびしすぎるので気になって行ってききた」と、編集子に語られたことがあった。病床の幽王氏がこの恩師の心からなる見舞に、どれほど感激されたことか。美しい師弟愛にジーンとくるものがあるではないか。

本誌三〇八号(28

年新年号)の巻頭「三人は朗か」で幽王、妄夢、梨里の三氏が縦横に若さをブチまけている。

梨里——ところで幽王さんはいつから川柳を始めはりましたの。

幽王——昭和十五、六年頃でしたか。

妄夢——そうですね、そうですね。結局同朋生が三人寄ったことになりすなう。という会話からみて幽王氏の柳歴は二十年になるようである。

男勝りのはたらし手として評判の妻女敬さんが、まだ夢のようであらう亡き夫のおもかげをしのびつつ次のように語るのである。

——気分がいいときはラジオでおぼえたベギー・葉山がうたう「南国土佐を後にして」をよく歌って聞かせてくれました。ことしの正月四日に近所の映画館へ行きましたが、そのとき冷えたのか、神経痛になったりはしましたが、少しは快方に向っていったようでしたの——。

川柳まつりの案内ハガキの表面に、うすい鉛筆の走り書きで一旬。
アスファルトぐにヤリぐにヤリと
詩情も湧かず

いつも枕もとから離れなかったであろう愛用の豆ノートには、氏独得の横巾の文字で句が綴られてあるのも涙をさそ

う。
もう言うまいと思ひし愚痴が又……と
未完成の句もある。

病ほげと見たか此頃見舞もとんと来ず
——こんな日もあったのであろう。

怒鳴るか殴るか猛烈な自己嫌悪
お好み焼やかままと芸術論をぶち
飛行機でポインソイツもかなわんな
自殺の型にも流行があるあほらしさ
かへの腕我が筋骨のきゃしゃな事
才能を信じ切ってる妻の眼よ
絶筆となった句は、やはり愛妻を詠ん
でいたのである。——合掌。(F)

幽王句抄

尼さんが二人やっぱりたべること
何ときまり文句の多いお梅
社長より五寸も高く気がねする
奥様と奥様敬語でけんかする
病人の俺に何やらかくしてる
かかる人ありしと墓標に刻まんか
女房も声をあわせて値切るなり
ちっほげな怒よお茶が冷えている
ガラガラも大人が振ったやかましき
いっぺんいうたろと思ふこと多く
盛花あわれ向きたくない方向かされて
とんぼ大阪で生れて非業の最後
俺の子が死にかけてるのに電車がのろい
児がものを言ふて呉れない怖ろしさ
ちとお遊びに来られて困る世辞を言ひ

映画なら伴奏がある児の危篤
女アナウンサーが姑みたことを言ふ
おかゆが吹きこぼれた騒ぎ病人飛上り
税務署が来たら病氣や言うといて
血を吐いているのにラジオは打ちましたく
女学生おもちやのような子を産んだ
雨だれば肺の山までぬらすなり
にこりともしせず電気代取りに来る
おっちょよこちよいの客からちよっぴりもうけとき
歌舞伎座で妻の猫背をたしなめる
くすぐったや妻がマダムと呼ばれて居
ひまだから床屋へ来ればこもひま
だから飼うなと言うたぢやないか金魚死に
たんつぼもしびんも親しいもののうち
看護婦につかませといてやと病人氣を使い
あんまりこて過ぎて病人放つとかれ
しんきくさい妻を今日だけ叱るまい
病み果ての茶碗を投げる意地もなく
医者が手を放してもホラまだ生きてるよ
しゃぼん玉ふらりふらりと俺みたい
ふと見れば妻も陣平が似合う輪
死とはこんなに悲しいものか骨袋
雨の日は雨の日らしい腹を立て
おお妻よ初夜とは遠きものとなり
つら当てに死ぬのもけったくそ悪し
ひびの入った茶碗よあんたはねてなはれ

(原句のまま)



・誌上冷房・

ぞーつと した話

白い手

須崎 豆秋

阿倍野の〇〇病院といえは、昼こそ大道に面しているので、タクシー、トラックなどが輻輳して賑やかですが、夜分になるとシーンとして人通りも少なく、若い女など物騒で、一人歩き出来ないという気味のわるいところです。その病院の前で、ある雨のシヨボシヨボ降る晩に、私がタクシーへ手を上げましたが、運転手は見えて見ぬふりをして走り過ぎようとするので大きい声で呼び止めると、シブシブパツクして何か小さい声でブツブツ言っているの、「オイオイ自動車強盗とも思っているのか」と私もつい笑いながら、ドアを開きました。走り出して運転手がボツリボツリと話し出しました。

「……旦那お氣をわるくさしてすみません、私が失礼な独り言をつぶやいたりしたわけをお話いたしますからまあ聞いて下さい。実は一週間はどの前、そうです矢張り今晩のようにシヨボシヨボと雨が降っていた夜半のことです、あの病院の入口で、夜目にも美しいうら若い女が、白い手を上げて私を招きますのですぐ車をその方へ向けますと、楚々とした足どりで乗車して、「〇〇町まで行って下さい」と言うんです、私もお客さんにあふれていた矢先に、しかもこんな若い美人が乗ってくれたもんですから、いい気分になって夜も更けていることもあり、快適なスピードで〇〇町まで走りました。と……この美人が車中から、「ここです、この瀬戸物屋が私のうちです、もう寝ているようですから、すみませんが起こしていただけますか」と申しますので、私は車から降りて、この瀬戸物屋の戸をトントンと叩きました。すると中年の御婦人が寝まき姿のまま戸を開けてくれました。「御苦労さんでした、お客さんに這入って貰って下さい」と言われるので、自動車の扉を開けましたとこ

ろ、さいぜんまでの若い美人の姿が見えまへん、空っぽです。

……これはおかしいと、実はこうこうで〇〇病院の前から……と詳しく話しますと、この中年の御婦人はびっくりして、「それではあの病院へ入院しているうちの娘は死んだんだ……それで……」というようなわけで、私も以来あの病院の前だけはお客さんを見たら逃げ出すことにしていたんです、とここまで話して運転手が、「旦那はまさか幽霊とは違いまっしやるな」と言って笑いました。

雨の音

正本 水客

街から甘いものが、そろそろ不自由になりかけていた遠い頃の話である。

山陰の旅の果てに、私は安米節で知られている松江大橋から中の海をゆく小さな汽船のなかにいた。宍道湖と日本海を結ぶ細長い水路は尽きては曲がり、時に大きく開けて眼を楽ませてくれる。船は二時間ほどで美保関の港にはいった。ここは関の五本松の民謡で昔から情緒をうたわれた所である。

土地のT氏が案内にたってくれて宿はM館にとつてあった。あいにく団体客とかちあつて海側の部屋はなかつたが、夜はT氏の取り



お買物は…
清く
明るく
美しい

大阪梅田・水曜定休

阪神

電 大代表(36) 1201



生妻をそえた白鳥賊の刺身の味が印象的だった。

帰りの船は島根半島の境港へ渡る。送ってきた彼女は船が動き出すと、手にした紙包を黙って差し出した。後で開けてみると岩海苔がびっしりはいっていた。

何時頃だったか、人の気配に眼がさめると、Yチャンが少し慌てたように坐っている。「旦那さん、済みません。団体のお客さんがともうるさいんです、暫く此処へ置いて下さいね」この町の人は昔から鶏の卵を食べない言伝えがある等、土地の話をいろいろしているうちに眠ってしまったとみえて、朝方、眼がさめた頃には彼女の姿はなかつた。

「お客さま!! こちらの部屋へいらっしゃいませ、お食事が出来てます。海がとつてもきれいですよ」山庭をグルッと回った向いの海側の部屋から手を振っている。

それから一年余り経った晩春の頃、山陰に足が向いたとき、半日の暇をつくって関へ渡ってみた。町は丁度、美保神社の青味垣の神事を行うお祭りで賑わっていた。昼飯に寄ったM館で、この冬頃からYチャンは病気で次の船着場にある実家に帰っているということを知った。「もし留守中に大阪のお客さんが見えたら本当に宜しく言ってくれと頼まれていたと同僚の女中さんが真顔で言う。

私は何か物足りぬ気もちで午過ぎの船に乗った。半時間足らずで次の小さな船着場に着く頃、余りに小説的な淡い希望を抱いてデッ

キに来てみて、私は自分の眼を疑った。紺かすりの着物を着たYが少し面やつれて棧橋に佇っていた。私は余りにお説えむきの偶然にびっくりしたが、彼女の方は如何にも当り前のようにニッコリして乗り込んできて、お久しぶりで御座いますと頭を下げた。週に一回ずつ松江の医者へ通っているんだと言う。薄曇った空が、松江へ着く頃から大粒の雨になって落ちてきた。彼女は橋際の土産物店で番傘を借りてくれた。来月ぐらいいから、また働きに出られますと言うので、それじゃ、そのうち全快祝いにきつと来ようと約束して別れた。雨は益々はげしく宍道湖の上に降っていた。

初夏の雨が音を立てて、弓ヶ浜へ続く海の上を渡って行った。その時の雨の音が今でも耳の底に残っている。

熊に会った話

後藤梅志

ちょうど初夏の頃でもあったか、熊に会ったのである。日本全国、深山に行くと、熊はまだずいぶんいるが、ひ熊は暴れん坊で、月の輪はおとなしいそうである。私が出会った場所は、紀和山脈の支降で、護摩の壇山(標高一、三七〇米)と伯母子嶽(標高一、三七〇米)の中間。むかし平の維盛が逃げこんだ深山で、あたりは一面熊笹におおわれた山の奥の奥であった。このあたりは、猪も、かもしかも居り、きし、やまどり、仏法僧もいる仙境なのである。なんで私がそんな場所へ行ったかという、恰度大戦の半ば昭和十八年の夏で、もうこの頃は日本の戦力もあやしくなつて来て、西のヒットラーと呼びして軍部は、木製飛行機を造ることに、戦力をばん回しようとする躍気になっていた。その原木は、ぶな材で、そこはぶなの樹の密林であった。私はその五千町歩にわたる林材の調査に行つたのである。

その山に熊がいることは分かつていたのだが、案内の柚夫が胆っ玉の太い男だったので、拳銃は山小屋へおいたなり猪犬を二頭連れて出掛けた。野田川村大股という部落から二里ほど分け入ったが、何しろ深山の奥というものは、南洋のジャングルと同じで、柚夫のもつ腰刀で道を切りひらいて行く場所が多く、それも大木と大木を結ぶ断崖のはしを行くもので、一つ足を滑らせると、数百尺の谷底へ落込むはなはだ危険な場所である。

時々樹間を照れる日光が、サツとさす所があるが、それはむしろ郷愁をそそるようなものであった。元米山へ這入る人達はみな腰に鈴をつけるもので、猪や熊は、このちりんちりんという鈴の音をきいて、「ははあん人が来たな」と道をかえる。だしぬけに出会うのが一番危険なのである。

もう熊笹がちらほら見え出して、ぶなの樹海も近いぞと勇氣が出て来たところ、三百年生ぐらいの樅の木根方のあたりで、ふと先頭を行く柚夫の話しが、急に途切れた。ゆっくり歩いてはいるが、へんに柚夫の眼は光り、何かをくばせをする。私は急に不安になり前方を見た。何か真っ黒い丸いものが目に這入ったが、間は七、八間あって、はっきり何かつかめなかったが、柚夫が「熊ですよ」とささやいた。そうと知ると先へ行くとする猪犬をおさえてぎよっとしたが、この辺が一番大事なところで、柚夫が谷の方を向いて「大分来ましたっしやろ、もう谷の音が聴えまへんな」とかな

んどか云い出した。それにつれて私も合槌を打って何か云ったが、その間二十秒ぐらいい、心臓は早鐘を打っていた。若しここでとび掛かられたら下は千仞の谷だ。しかし運があった。流石に熊は山の王者で、のっそり向きをええるとゆつたりと熊笹の藪へ首を入れた。その後ろ姿を私は、ぎょう然と見据えたものである。

一分ほどで猪犬を放つたが、もう烈な犬の咆声をきくだけで熊はもう消え去っていた。

数日の後、命知らずの若者達が一頭の月の輪熊を仕とめて来た。廿五、六貫あったという。可哀そうなことをしたと、誠に寝覚めが悪かった。

今は昔、大戦中の思い出話。

(生野区)である。

七年前の夏だった。コチコチの天理教信者で、ちょっと神経質な職人がボクの顔をあたっていた。彼には子が二人あるそうだが、ぶあいそな無口者で、しかし仕事はまじめだった。誰もがやるウツラウツラをいい気分で作っていたところ、急に、頬から剃刀の感触がなくなつて、ガタガタガタという不気味な音があるのでフト眼をあけると、寝かされているボクの顔の上で鋭利な日本剃刀がピストンのように動いているではないか。ハッとしたが、ヘタに椅子から逃げようとしてグサツとやられたらもうおしまいだから、ええい、どうともなれと度胸をすえたころ、店主がそれを見つけてアソを食って飛んで来た。テンカンだぞうであるが、よく試験にパスしたものである。クビにしてくれるなと頼んで帰つたのに、次に行つた時はやはりクビになっていた。


鼻先きに剃刀

不二田一三夫

三十数年間、ボクの調髪は同じ型であり、理髪店も三軒変わっただけである。最初のR理髪店主は布施で夜逃げ、二度目は天王寺区のY理髪店ではこれは女極道で店をつぶし、三度目が、つまり現在のK理容店

野尻千草の

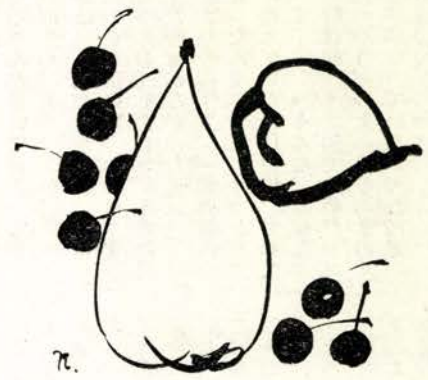
料理教室



会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側
ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943



シヤン

松江梅里選

シヤンなので改札大目に見て通し 岳詩
美容院素敵なシヤンにして帰えし 恒雄
シヤンで売る女に暗い過去があり 七星
同性の嫉妬でシヤンがふりむかれ 箱川
シヤンだと云うて怒られ引合わす 木魚
シヤンのいる売場略図を書いてやり 宵明
ずば抜けたシヤンに不発の恋も秘め 南牛史
熱海の灯シヤンは社長をスズと呼び 井蛙
国籍を疑うようなシヤンが行く 夢路
テレシヤンなどとタレントへ嫉妬する 敏子
男の眼をシヤンは意識をして座り 鶴汀
売れた妓のシヤンへ女将のつけとけ 淀月
シヤンつんと鼻へ冷たいものを持ち 実男
いつの世も歴史はシヤンで作られる 博
サラリーで足らぬないシヤンの装り 和楽
シヤンばかり揃らぬ商魂たくまし 昌男
シヤンやなもつたないは失礼な 狂二

一

路

集

し詰めがうれいシヤンの両隣り しのぶ
奥さんはシヤンでまなあと云えば売れ 白溪子
あまりにもシヤンでうっかり気を許し 古心
シヤンだったから強引に貰いあげ 蜻蛉
ネクタイの売場へシヤンを置きかえる 生薑
旅帰えり女はシヤンにして話し むしな
さきシヤンであつたと思ふ年増振り 愛鳩
シヤン通る線路工夫は歌で呼び 静水
写真ではシヤンに撮れてる珍竹林 句念坊
看護婦が美人に見えるはに慮え 千里
シヤンだった頃のアルバム出して見せ 一休
言訳は写真うつりの悪るいシヤン 雄々
ふり向かずシヤンは舞台の気で歩き 葉光
教養がシヤンに風格まで備え 九呂平
他社にまで美人の祕書は売れており 一鶴
妹のシヤンが見貴の株を上げ 兼治郎
その昔シヤンと言われた単衣帯 保美
中年のベースが狂う美人 秘書 春雄
われこそはシヤンソフツコンモデル行く 佳峰
シヤンの娘に粟の集めを頼む酌 慈雨
シヤン今日は整形外科に用があり 雄声

シヤンが来て職場の平和乱れかけ 同
世に堪えたシヤンの昔を束ね髪 光郎
村のシヤン村の若さがつきまとい 同
深水の絵も足音によれぬシヤン 藤波
金にも云わせて美人第一位 同
さしかけてやりたいシヤンがねれて行く 圭井堂
シヤンでさきあればと望む若さなり 同
噂するシヤンが通ると狭い町 豊年
ウインドもシヤンが覗けば覗かれる 同
みとれてた美人に道を尋ねられ 参無子
みなシヤンに見えてはたちの春倫し 同
もらうならシヤンを貰えと若い叔父 惠二朗
シヤンですと顔に描いてるイヤリング 同
幸福は隣りへシヤンが来て匂い 雪峰
こんなシヤン見たことないとおだてられ 同
勸誘にトツプキードのシヤンを遣り 代仕男
バスガイドシヤンで説明聞いてらさず 陽子
母一人娘一人シヤンでまた二号 保夫
美人には惚れぬけなげなことを云う 葉光
見返してやる気へシヤンに縁遠く 九呂平
シヤンだからまさか後家では通せまい 葉春
一斉にかしら右さすシヤンが来る さんたく
お客みなシヤンで仲居の無愛想 十九平
政略に哀しい美女の姿なり 孝風
シヤンだとの意識へポーズする鏡 光郎
シヤンと云うそのツツテの冷めすぎ 一鶴
地 尼さんがシヤンで勿体ないような 十九平
天 シヤンを見る眼を妻の眼が捉らえ さんたく
軸 ミス日本シヤンを背負って立って落ち

他人

後藤梅志選

血を分けた人と思える情があり 徹也
家裁から他人になった顔で出る 万女
他人ならこんな憎くない夫 吉枝
他人様に告げる収穫ちと異が 南牛史
倦怠期他人のような口もきき 井蛙
肉身は冷たし一と肌ぬぐ他人 夢路
名門に育ち親子も他人めき 鶴汀
貧乏をすれば他人のように云い 函谷
本心と別に他人は賞めそやし 梢月
他人事は御苦労さんで済しとき 雄声
他人様のものははめとく齡になり 淀月
御曹司他人の飯も食べさせ さんたく
愚痴じゃないけど他人の方がまし 夜潮
他人から他人へ噂太うなり 義夫
就職し他人の中に強く生き 白葩
他人なら言える仲裁買うて出る 初甫
他人とは思えぬ人の情に触れ 宵明
他人とは思えぬ人の情に触れ 旅風
コップ酒もう十年の知己になり 葉春
あほらしい他人が当った宝くじ 秀峰
他人から見ればしあわせうに見え 恒雄
他人事で済まぬ婚期が遅れて来 滔川
里がえり娘他人の顔で来る 七星
他人から他人へ不幸に生れつき 蜻蛉
出来のよいお孫さんで他人は褒め 繁太郎
へそくりを他人名義にして預け 晃康
他人には渡したくない娘が家出 ともつ
印一つ押し家裁は他人にし 山椒坊
他人の子は何を食べるかよく太

更生の覚悟を白眼がくじき 妖人
 他人でも身内以上の友もあり 和楽
 憎まれぬ程度に他人意見述べ 木堂
 他人の恋だからはつきり割り切る 昌男
 他人だった頃の渾名で睦まじい 保美
 他人にはわからぬ釣の朝を起き 同
 言にくい事は他人の口をかり つけお
 もう他人ではないらしい話ぶり 岳詩
 腹の子へもう他人ではない二人 光郎
 酔えばすぐ見貴見貴と言ふ他人 九呂平
 他人の事とかく気になる赤い国 孝夫
 ノックする音で他人の顔になり 実男
 どん底に他人行儀のないくらし 葉光
 心づらに他人のように歩かされ 圭井堂
 きつぱりと離婚せよと言ふ他人 宗太郎
 他人なら言わぬ叔父が来て意見 藤波
 雑草の中に埋もれる無縁塚 定月
 胃潰瘍切れと他人は軽るく云う 兼治郎
 親切は然し他人の域を出ず 与根一
 他人ではいやと従妹を妻にする 三舟
 他人には通じぬ目言葉指言葉 恵二朗
 利子だけは兄へ他人として払い 雄々
 三等車他人の隣で子は眠り 敏子
 相談欄つまりは他人の云う意見 むしな
 故から他人行儀をつねられる 十九平
 友人に云える事でも妻に秘し 句念坊
 宿帳は他人のままに二人 慈雨
 いも専で他人の入る余地もなく 豊年
 コップ酒他人の愚痴もきいてや 春雄
 不倅つづき他人の世話になり 静水
 親友へやはり他人の線をひき 愛鳩
 女秘書もはや他人でない瞳 代仕男
 同舟の他人行儀を淋しがり 半休
 発車するまでは他人のままに 佳峰

他人から指をさされた子が出世 旭峯
 しみじみと知った他人の有難さ 蘭
 遭難を他人好奇の目でのぞき 美音子
 頑固さと僻み他人の手も受けず 古心
 アルバムへ他人であった頃の妻 白溪子
 結局は他人と知った昨日 今日 登紀
 他人ごとと思えど悲しい社会面 圭木
 他人から見れば妹美女に見え 孝風
 他人行儀なくしてくれて嫁らしく 蘇水
 佳
 筋金を入れる他人の飯をくい 陽子
 無い智恵をしばつてくも他人なり 保夫
 結局は他人あつさり寄り付かず 庸佑
 他人には気を許すなと育てられ 一鶴
 他人ではないと二本よばれて米 敏明
 女房は他人のボーナスまで気にし 虹要
 五月晴れ他人のシャッター切つてや 敏子
 人
 水過ぎた春が他人にしておかず 雪峰
 働いて貯めて他人の子を貰い 和三郎
 天
 道楽の一つ他人の世話をやき 生薑

上品

田中烏雀選

上品な言葉の影に刺があり 幸藏
 上品は買うに買われぬ特価品 しのぶ
 上品な妻の目顔でかしまり 柏月
 三ッ指の妻に裸をにらまれる 参無子
 お上品な方よと暗に敬遠し 天悟空
 上品な茶器のくぼみが持てる味 義夫

上品に暮して華と茶を教え 蜻蛉
 はかまはく今日は雅会の話ぶり 佳峰
 上品なくらしに倦きた置手紙 淀月
 上品に育ち未だに縁がなし 秀峰
 上品な口に油断が又も貸し 隆史
 上品なところが伴の気に入らず 妖人
 上品な柄が娘の気に入らず 愛鳩
 行商の女上品なが哀れ 登紀
 上品も下品もなくて金を貯め 旭峯
 おかわりへ上品すぎる飯の盛り 晃康
 上品な人もあくびは止められず 圭木
 上品で無口で談事がはかどらず 圭井堂
 上品な奥さん小さな声を出し 幽谷
 上品に喰べて帰れば腹が減り 夜潮
 上品な夫人も安い方を買ひ 藤波
 上品な夫婦何にも買わず去る 半休
 懇談へ上品振つて座を外し 十九平
 上品なニコヨン過去を語らない 孝風
 特売場うっかり上品忘れかけ 蘇水
 上品なつもりおの字をつけたがり 陽子
 上品なお菓子眺めて見合済み 初甫
 上品はミスコンクールに遠くいる 和楽
 上品な母で娘も縁が出来 敏子
 上品な人の哀れな過去を聞き 保夫
 借りに来て上品振つて言ひまされ 和三郎
 上品を売りものにしてうとまれる 恵二朗
 三ッ指をつかれ押売られるなり 一鶴
 上品な伯母さんが来て座が白け 宗太郎
 上品な方ねと好きを見透かされ 南牛史
 上品な女寂しい影を持ち 鶴汀
 上品な顔が崩れる灸の効き 九呂平
 上品なだけが取得の後妻が来 つけお
 上品な言葉の裏に有る皮肉 代仕男
 上品にされ窮屈な酒をのみ 井蛙

上品さちよつと忘れた特価品 悦子
 上品な奥さんラッシュに置いてかれ 虹夢
 上品に生れひよわな子に育ち 雄声
 上品に育てて弱い男の子 しげお
 同じ柄着てもこんなに着る品 実男
 上品に旧家だんだん落ちぶれる 与根一
 上品にしていて又も乗り遅れ 庸佑
 上品な欠伸は扇橋にとり 豊年
 土壇場で紳士仮面を脱ぎ捨てる 吉枝
 上品に笑つて腹の探ぐり合ひ 敏明
 上品な弁当箱で腹がすき 静水
 上品にみせる標準語に疲れ 雄々
 上品なタイプが結婚詐欺をさせ 実男
 上品な菓子に思案の子 沢山 三舟
 上品な言葉で社宅気が疲れ 雪峰
 上品が買ひ得という場をあさり 徹也
 デパートへ上品ぶつて出かける 蘭
 上品な叱言は広い家に住み 蘇木
 上品さ今日は八百屋をまごかせ しげお
 上品なお方でしようと思つた気 生薑
 上品をかなぐり捨てた特売場 岳詩
 下町にどこか違った元貴族 昌男
 上品な言葉で痛いとこにふれ 水堂
 上品に待てば順番追越され 美音子
 上品な事言うてる腹の虫 静水
 人
 上品な役が似合つて四十過ぎ 白溪子
 金借るに貴族の弱い線が出る 菜春
 地
 上品に叱れば子供顔を見る 真奇
 天
 上品に見せる素顔のままに 保美
 軸
 笙吹くは別けて品よし止六位

柳界展望

旬会

▼本社八月旬会は七日(金)午後六時から道頓堀文楽座別館で開催する。多数御出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪

市)は七月二十一日午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼

上で開催。▼川雑舞支部旬会は七月七日午後六時から摩天郎居で開

催。▼大阪通信病院川柳会は七月十六日午後四時から五階会議室で

開催。▼コッコ川柳会(大阪市)は七月十七日午後五時半から黒田

国光堂で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)は七月二十三日午後

六時から難波の親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼大鉄局

川柳会の一乗寺吟行は七月五日同行九名で行われた。▼川雑京都支

部百回記念旬会は川柳まつりを兼ね七月十一日午後四時から四条繩

手仲源寺で開催。路郎主幹の代理に薫風子が出席した。不朽洞会か

らカップが寄贈された。なかなかの盛会。▼川雑出雲支部は七月十二日に立久恵映三合閣で川柳まつりを開催。▼川雑倉敷支部は七月十二日に川柳まつりを一善居で開催された。▼岡山電報局ゆめ旬会

は六月十七日法院居で開催。▼川雑備前支部旬会は七月十一日夜

横山一声居で開催。▼広島平和祭川柳大会は八月九日(日)午後一

時から広島市袋町山陽記念館二階ホールで開催される。

消息

▼武部香林氏(大阪)は七月二十日若菜さん同伴で本社を訪問。路

郎夫妻と歓談された。▼浜田久米雄氏(岡山市)は五月中旬から血

圧が高くなり憂慮されていた。そうだが、以来禁酒され医者

の指示を忠実に守ったため順次低下された。▼前田伍健氏(松山市)

は六月末、今治市公会堂で南海放送主催の「お笑い法廷」の裁判長

をつとめられた。▼戸倉普天氏(兵庫県)は四月以来旅行がちで

播州書写山に遊び富士製鉄広畑工場を見学、又室戸岬から桂浜、松

山、道後、高松と四国を廻遊、五月下旬は東京、仙台、松島、鳴

子、足利、伊勢崎から北陸一帯の旧知を歴訪された。▼速水真珠

洞氏(福岡市)は六月十八日熊本県杖立温泉に遊ばれた。湯の香

と河鹿の声、山峡の青葉と巖と結、山の湯の雰囲気こそ老人の真

実に強く訴えてくるものがあると頼信があつた。又二十日は阿蘇

に足を向けられ美相の極致とも天下の悪相とも受取れる阿蘇山の物

凄息吹きに感慨を催された。▼堀口塊人氏(西宮市)が代表取

締役である大阪衡器株式会社は六月十八日大阪市西成区姫松通五丁

目二二へ出張移転された。▼梅木宗一氏(石川県)は石川県民の歌

に応募して見事に入選された。氏は金沢地裁に勤務、地方文化人と

して常に活躍されている。▼小西無鬼氏(兵庫県)は篠山町会議員

選挙に立候補七月十六日開票の結果見事当選された。お祝い申し上げる。▼高安六郎先生を偲ぶ会は

七月二十一日一時から三越劇場で開催。生前医学界、芸能界、文学

界に貢献された氏を偲ぶ多数の出席者で賑った。本社からは路郎主

幹の代理に麻生霞乃夫人、中島生々庵夫妻等が出席された。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は六月十二日第

一次成形手術を受けられ、回復意

外に早く日々ほがらかに作句に精進して居られる。▼西川晃氏

(大阪市)は七月二十日西田辺町の宮下医院に入院、痔の手術を受けられた。▼岸川連氏(大阪市)

は職域の「全久保田川柳会」に第一位を獲得、これで春秋三期連続優勝を遂げられた。▼中村九呂平

氏(下関市)は宇部市の川柳おきのやま一周年祝賀旬会に出席、広島、山口から遠来の柳人諸氏と交

歓され、旬会後一同坑内を見学された。▼野村味平氏(加賀市)

は蟹の目社主催の第七回県下川柳大会に出席、伊藤茶仏氏(小松

市)と歓談された。▼中島繁郎氏(長野県)は芭蕉翁の洒落堂にな



川村好郎師を迎えて

(羽曳野どんぐり旬会)

写真説明—前掲つて左から池田正人・坂

倉及吉・吉田日晴・川村好郎・水田楓樹・小山秀

遠・後列つて左から五村善之・大島幸隆・武田

司子・橋本知邦・吉本文彦・保坂正治・田中康

之・白井清風・松田平幸・辻本光保・下平源・川

西法典・高橋尚史・武田善幸・前川道孝・井阪東

天紅・西村幸子・三宅綾子・奥田五子

(五・一七)

食堂とホテルと集会場

北極星

・心休憩お一人様200円・お宿りお一人様400円

大阪・戎橋 TEL 戎(64)1275~7



七月二日の夕、諏訪の森の中島邸で生々庵副主幹の六十一回誕辰祝賀の内端的な集りがあった。東京都からこの集りにわざわざはせ参じられた武場隆三郎先生は生々庵先生と同じ誕生日。令息一彦氏がシャンパンを抜いて御健康を祝福された。

写真説明— 前列向つて左から生々庵夫人の小石さん・日舞の花柳万吾さん・中島生々庵夫人の藤乃女士・東京都の武場隆三郎医師・寓生路郎主幹・福山人の須恵子さん・後列向つて左から生々庵長男一彦氏夫人の藤代さん・合孫の滋部ちやん・三男の孝之君・福山氏令息佳佑君・三水電気の福山和夫氏・令息中島一彦氏

らつて庵を建て、良寛和尚の「無心」なる額をかかけて無心庵と号し、茶をすすりながら山を愛し水を嗜む生活をしていられる由。御告弟の冥福を祈るため奥さん同

伴で靖国神社、日光、善光寺巡回の旅に出られた。▼中松恒雄氏(加賀市)は精神病院の建設に取りかかる一方、専修生として金沢大学医学部精神医学教室に通つておられるので多忙の由。

慶 弔

▼新川博也氏(大阪府)は六月十九日次男出生、浩司さんと命名された。お祝い申上げる。▼小島和泉氏(市松)は七月二十日午後十一時に高血圧で死去された。氏は大正八、九年頃、泉大津の楊柳吟社から、柳詒「楊柳」を刊行して、紺之介の号によつて活躍されたが、後、俳句に転じ小島和泉として号されていた。行年七十五才、謹悼。自宅は泉大津市戎町八八。▼木下幽王氏(大阪)が七月三日午後十一時に住吉区長峽町七二の自宅で亡くなられ五日に庚申さんの奥の院で告別があつた。本社から路郎、霞乃、生々庵、栗、文蝶、小松園、恒明、潮花、豆秋、貴山、愛論、史葉、好郎、梅里、安渉氏等が焼香した。

転 居

▼新川博也氏(大阪府)は大阪府和泉府山市肥子三幸荘へ。▼浜田久米雄氏(岡山市)は岡山市弓之町一〇八鉄道宿舎五ノ一へ。▼魚

住満潮氏(大阪市)は大阪市西成区玉出本通四丁目六へ。(薫) 電話開通 ▼高橋操子さん宅に電話が開通した。岸貝局②六六三一番

不朽洞

★常任理事会 七月二十三日午後七時から三休

会から

後七時から三休 橋南詰西入中島小児科診療院階上で開催。議事は大阪市川柳大会の件其他。 ★会員種別変更 武部香林氏(大阪市)は七月から特別会員に変更。

☆新会員紹介

六月 谷沢好祐(大阪府) 正会員 白水氏推薦 七月 高津徹也(堺市) 正会員 好郎氏推薦 横 水泡(愛媛県) 正会員 榮氏推薦 (い)

社の黒板

異 動

★武部香林氏は七月三十一日限り総務部長を勇退された。★八木摩太郎氏は編集部から香林氏の後を襲うて総務部を担当されるれことに

<p>暑中御伺</p> <p>小児科・沢田医院</p> <p>沢田四郎作</p> <p>大阪市西成区玉出本通り一ノ一三 電話⑧二九一三</p>	<p>武部香林</p> <p>武部若菜</p> <p>新住所 大阪市東淀川区三津屋中通三丁目二〇</p>	<p>金子呑風</p> <p>信州上田市袋町</p>	<p>菊沢小松園</p> <p>大阪市阿倍野区王子町三ノ三四 電話六六四四番</p>
---	--	----------------------------	--

なつた。★西川晃氏は八月一日から編集部員となられた。



いのちある句を創れ

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 川柳まつり (大阪市)

7月12日 正午

会場 大成閣

恩師のお誕生日を祝う川柳まつりも、かぞえて本年度で六回目を迎えることになった。

はるばる東京から石川から、または広島、島根、鳥取方面からも門下がはせ参じるという師弟愛の美しさは、これはちよっと他社ではみられないものであるう。

年々盛大になっていくことは、ひとり川雑だけのものではなく柳界全体のよろこびであらうと思う。

34年度の麻生監郎賞は、川雑にしなり支部の逸材西川晃氏が堂々獲得し、その優勝権は一年間にしなり支部が保持することになった。

七月の不朽洞賞杯は出席優先で名手真鍋一瓢氏が握り、入選第二位は伊達優子氏と、ここに栄えある三賞の行方は決まったが、いのちある句を創れのスローガンは永遠のものである。(本文自26ページ、至30ページ参照)

出席者 監部・与呂志・潮花・貴山・昌男・いさむ・月都・鳩花・豆秋・花村・湖山・左文字・好郎・呑木・圭木・全

兼題「夕涼み」 北川春巢選

信・香林・若菜・柳志・晃・没食子・帆舟・佳生・歌村・舟遊・弦月・夢路・清潮・狂二・静水・古方・たかし・満秋・連・摩太郎・牧人・庸佑・文秋・聖子・永断・日本村・梅志・和菜・葉・いわを・紅月・漂月・十悟・博也・三十郎・貞敏・愛論・美喜・多久志・水客・メ女・一瓢・梅里・阿茶・小松園・清子・清人・一栄・文蝶・寿栄・半歩・小石・清子・保美・句念坊・井平・春巢・和男・薫風子・鶴汀・白溪子・凡志・越山・可住・光輪・静代・操子・芳子・よし子・小米・つゆ・茶仏・雄声・恒明・黙平・捷治・笛生・柳宏子・一三夫・菁風・敏明・太路・一円・木堂・淡舟・直人・笑路・勝一・旅風・南宗・一求・高史・繁太郎・武助・きさ子・三司・竹莊・尚史・良子・静馬・言也・万楽・梨里・哲夫・俊江・季費・一平・白柳・生々庵・明朗・高志・雅堂・白木・葉乙女・六童子・愛二・宏子・霞乃

大供が花火にたかる夕涼み 静馬
怪談に寝た子を忘れ夕涼み 良子
七福神のよう縁台の夕涼み 薫風子
珍客に非礼を詫びる夕涼み 一傘
夕涼み二個目のタバコ買いにやり 一三天
夕涼み大阪城が白く浮き 牧人
夕涼み元将軍の型で掛き きさ子
敷が一二つうるさい夕涼み 白柳
ナイターの空が明かると夕涼み 摩太郎
一人また尋問受けた夕涼み 好郎
アベックを通さぬ路地の夕涼み 武進
ビール冷しとけ夕涼み出してしま 武明
マッチ箱又空にした夕涼み 明朗
夕涼み巡査のっそり顔を出し 永断
山頂へ来てまでネオン見て涼み 陽子
母親が涼みに出たら眠たがり 天悟空
冷やかに欲しい二人の夕涼み 左文字
母となる妻いたわって夕涼み 参無子
夕涼みの前をホテルのプラカード 奈良子
年頃を匂わせて来る夕涼み 暖子
町内のミスを決めて夕涼み 紅月
おとなりの赤ちゃん借りる夕涼み 木堂
お隣のテレビへ集る夕涼み 保美
かみしものような浴衣で夕涼み 季贊
ビール腹もたまはる夕涼み 与呂志
むしかえる暑さを云う夕涼み 宗太郎
夕涼み抹茶家族がずらりと居 南宗
打ち揃えた蚊を見て居る夕涼み 高志
夕涼みのドライブがまだかえらない 古方
五六歩の庭へ出てみる夕涼み 雪峰
しあわせの風を袂へ夕涼み 雄声
こんなよい男が暇な夕涼み ひか平
夕涼み裏の墓地から風を入れ 新雪
夕涼み屋根の上にも一人居る 月都
閑なことバーが総出で夕涼み 文秋
夕涼み「成り歩」へ王将の疲れよう 六童子
あせほ出来た子だけ白い夕涼み 一瓢

夕涼みダイヤとなった掌の螢生 薫
ナイター放送へ耳は向いて夕涼み 春巢

兼題「笑い」 西尾 菜選

又笑う日もあり今のこの苦勞 失名
笑うて見てもやと鏡からはなれ 一傘
笑うても泣いても同じような顔 捷治
亡き母の笑いと真似る三回忌 武助
炭鉱の町に笑わぬ子が育ち 漂月
まだ若い若いに笑はずまさる 恒明
微笑の男に弱い意志表示 六童子
笑わしらの附添はんが叱りはり 惠二朗
床柱からの笑いで座がはずみ 水堂
次の間へ逃げて笑いは止まず 没食子
三枚目家へ帰れば笑わさず 一三夫
立読みの笑いへ店番こつちむき 鈍愚坊
笑つたら顔へ叱言が言いそびれ 水堂
あん蜜に若い世代の笑い声 三司
片親で無事就職の日を笑い 美喜
笑い声重役室は決つたらし 凡志
笑わせておいてシャッターおせいと 夢路
笑つては居れぬ順番回つて来 静水
それがと刑事も笑つて取り調べ 静水
朝からの笑いへ袍軽う持ち 真平
笑い顔見せて安心して貰い 葉光
笑う事忘れたような女秘書 寿榮
先生の笑い止まらぬつづり方 万楽
意識して笑えば自嘲めいた顔 武助
悪人の笑いで次週期待され 雅堂
笑わせて泣かせ舞台は暗くなり 梅里
その前夜笑いの止まぬ灯を囲み 梅里
胃が悪いさかいに笑えと仰言つて 十悟
バス降りて続きを笑うハイライオン 清子
センスある笑いで始まる婦人会 光輪
笑い合う話は金のメドがつき 与呂志
許す気になって主任の眼が笑い 若芽

さからわず笑うばかりで女勝ち 尚史
 碁仇に黒を渡した日の笑い 陽子
 大物が笑い飛ばして受付けず 日満
 ライバルを意識して迎える高笑い 花美
 噂とは別な笑顔で迎えられる 宗太郎
 笑ってはならぬ席へ押し出され 湖山
 そろばんを弾いた上の笑い顔 旅風
 大きく笑うて妥協許さない 水客
 笑い声今宵めでたい奥座敷 牧人
 狂女のような笑いで抵抗し 芙蓉
 女客の笑い間借りの気が疲れ 夢路
 正直が笑い隠さず飛んで来る 与呂志
 営業用の笑いと見抜く金を持ち 春巢
 もう笑いますと写真が添えてあり 嘔子
 思い出し笑いうっかりししかかけ 花村
 鼻薬が効いた笑いと見てとられ 紅月
 子沢山ごまかし笑いの旨い父 采

兼題「久し振り」 市場没食子選

久し振り黒字帳簿に来る 税吏 慈雨
 久し振り会えばどちらも飲む話 昌洋
 初孫へ国から母の久しぶり 一鶴
 久々の友札ピラを切って見せ 三歩
 久し振りくらべ合つて禿げつぶり どんたく
 そんなことあったと久し振り 旅風
 久し振り孫の肥りを抱いて見る 東天紅
 久し振り逢えばどちらも未上人 若芽
 俺は瘦せ向うは肥えた久し振り 遠二
 あれからの月日にも久し振り 葉光
 やつぱり君やつたんかとパスの中 晃
 つ、井ずつ面影残る同窓会 小米
 久し振り飲む一級はもらいもの 黙平
 久し振り七夕はんにされて飲み 曜子
 久し振り女同士の目は探り 寿栄
 久し振りに会えば骨相まで変り 白水
 久し振りに来て金のこと言ひそびれ 一傘
 久し振り地酒とアユにもてなされ 真奇

泣きボロの指でつづいた久し振り きさ子
 久し振りパンパシオン屋で出合い 春里
 昔なで聞くお近いうちも久し振り 梅
 よも山の話一番鶏を聞き 句念坊
 お互の白髪をはめて久し振り 葉乙女
 十年の皺は互いに認め合い 左文字
 会えば愚痴別れも愚痴久し振り 武助
 出張で富士を仰いだ久し振り 清人
 初恋の頃にふれた久し振り 雄声
 久々に来てもう帰るもう帰る 阿茶
 久し振り引揚の船へ電波で母の声 敵
 久し振り逢えば名取りになっている 竹莊
 久し振り一さし舞わん黒田節 東天紅
 久し振り会えば旦那が又変り 南宗
 久潤へ友の出世を見る名刺 六竜子
 久し振り逢えば二度目を連れており 弦月
 久し振りだわとさつちもい子持ち 雅堂
 久し振りに訪ねて来たは金のこと 高志
 久し振りこんな軽い母となり 恒明
 久し振りに来た橘すじの変わりよう 宏子
 久し振り夫の飼育語り合い 水堂
 久し振りですなと告別式で会い 豆秋
 御許しの出た一合が腹にしみ 嘔子
 試歩一步大地の久し振り 漣
 久し振り言うて女将は酌いでくれ 半歩
 久し振りもどつてうちに居てくれ 静水
 久し振りの壁もなつかし久し振り 牧人
 落書きの壁もなつかし久し振り 小松園
 久し振り恋も怨も消えた顔 左文字
 何年振りかいなと五指を折り返し 三歩
 久し振り腹の虫まで酔いつづれ ひか平
 久し振り履くハイヒール転げかけ 月都
 久し振り近より難い人となり 連
 娑婆の風吸うた保釈の深呼吸 柳
 もう死んだ奴の名が出る久し振り 小松園
 ちとして置いてや久し振りの恋 いさむ
 久し振り目出度い話持ち込まれ 日満
 長女です長男ですと久し振り

久し振り仇名を言うてうなすかせ 車楽齊
 なつかしように言うてくれるが名を忘れ 清子
 一票で来たなとおもう久し振り 日満
 全快へこんな笑いも久し振り 雪峰
 久し振りストへ部長もパチンコ持ち 柳宏子
 久し振りの逢瀬へ悔をまた残し 保美
 久し振りに来たが起伏に変わりなし 古方
 全快の手に不益も久しぶり 没食子

兼題「出直し」 若本多久志選

出直して来いと金策脈があり 圭井堂
 出直して来たのにライバルまだねばり 山椒坊
 出直しの足階段を二つとび 古方
 更生を誓えば娑婆が醜すぎ 昌洋
 出直して来た人生も又けわし 半歩
 出直してくれば弱気になっている 淡舟
 出直しへ故郷の駅をそつと立ち 昌男
 出直して集金の汗をふき 敏明
 出直してみよう八掛も凶と出る きさ子
 出直しの地下足袋ちつと大きすぎ 芳子
 出直しへ内股になる綿帽子 承平
 出直しへ内股になる綿帽子 承平
 口ひげを落とす人生出直す気 春巢
 出直しの意味で一杯飲むときめ いさむ
 出直してやれと援助はしてくれず 高史
 死んだ気になって出直す坊主刈 葉光
 出直しをする口実の知恵をかり 水堂
 出直してばかり人生くたびれる 梨里
 出なおしのきかね望みを子等につけ しのぶ
 出直して来たのに親父また折れず 南宗
 出直した男それから運が向いて 茶仏
 出直した男それがゆるい縄のれん いさむ
 出直して来たべんちやらはサトウキビ 一瓢
 出直して来たおしやべりは腰を入れ 鈍愚坊
 出直してくると何べんでも来る気 梅志
 出直すししてはとことん来てしまひ ひか平

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎がし第
 丹月堂
 中野セニセニ

何もかも出直す朝の歯を磨く 三司
 出直してばかり履歴書行が増え 尚史
 倒産へ笑ろて出直す土性骨 晃
 出直して出直して来る約手なり 好郎
 出直すんやでと警官旅費を呉れ 日満
 出直す気ならばと社長の太っ腹 鶴丸
 出直した開店チンドン屋にも折り 若菜
 今度来る日を出直し念を押し 菜
 出直しをしんから誓う鈴を振り 奈良子
 出直してくれば女は気が変り 南宗
 出直して燈明あげて母祈る 帆舟
 出直して来ればおごしの花が咲き 参無子
 別居して出直す朝を共に掃き 三司

席題「逢ひき」 菊沢小松園選

午後六時いつものとこでわかる仲 好郎
 時間助行の逢ひきへ肩がこり 良子
 逢ひきの電話幸い誰も居ず 万楽
 逢ひきと知れず母は食へず待ち 庸佑
 雲間もる月に逢ひきにらまれる 井平
 逢ひきへ妻きつちりと靴をろえ 清子
 逢ひきのだんだん淋しい道を行き 歌村

逢びきに行くとも知らず送り出し
 逢びきに来てまで金の事に触れ
 年に関係おまへん逢びきたのしもう
 こつそりと逢うに派手を化粧する
 逢びきの電話さつちり感すかれ
 この人も逢びきらしい顔で立ち
 逢びきへ弟少し邪魔になり
 逢びきの時を知らせるみおっくし
 逢びきの言訳嘘も種が尽き
 逢びきが動いて虫の声止まり
 点景になる逢びきの美しく
 呼び出した方が逢びき涙ぐみ
 惚れている証憑逢びき先に待ち
 逢びきに行くお化粧を母知らず
 逢びきはもう新妻と言う素振り
 逢びきへヘッドライトがわてさせ
 逢びきの何時ものところ親が来る
 逢びきの二人へ月がきれいすぎ
 蜘蛛の巣を付けて逢びき帰って来
 逢びきの電話がすまぬ順を待ち
 給料日まえのデイトは歩くだけ
 逢びきへ螢が道をあけていき
 逢びきの嘘ナイターをまた使
 逢びきの蛙を踏んだ声を出し
 逢うているらしいベンチへ遠きかり
 床屋から出たその足で逢いに行き
 夕食の逢びきやっはり橋の下にする
 逢びきのこころは最初に逢うたこ
 逢びきの電話課長に取り次がれ

見 舟 遊 小 石 歌 村 和 桑 庸 佑 太 路 静 馬 句 念 坊 可 住 古 方 生 々 庵 文 秋 狂 二 い さ む 鳩 花 捷 治 圭 水 鶴 汀 好 郎 一 三 夫 佳 生 一 三 夫 紅 月 柳 志 言 也 愛 論 湖 山 茶 仏 席 題 「 寝 顔 」 正 本 水 客 選

子の寝顔夫婦へあずに迫る金
 スクリーンへ寝顔を売ってスターなり
 つみのない顔で代議士いねむりし
 此の寝顔がよろめいたとは嘘のよう
 兄たり難く弟たり難い寝顔
 いざこさを何も知らない子の寝顔
 よろめいた罪の意識もない寝顔
 看護婦が深夜の寝顔見て廻り
 子供らはいいなあ寝顔見て話し
 こんな寝顔と連れそうて五十年
 姑の寝顔意外に他愛なく
 平凡な女の顔で寝てる女史
 葉飲む時間静かな寝息して
 順々に寝顔ころがす子沢山
 静かなる寝顔ラジオを切つてやり
 まぶしさにあつちを向いてる寝顔
 破れてるらしい寝顔に蚊が止まり
 寝顔だけ見れば姑くとは思われず
 狸寝の頬がゆるんで来た寝顔
 美しい寝顔見ると目をあける
 安心をし切つて寝てる猫の顔
 安らかな寝息のなかに僕がいる

三 司 阿 茶 見 子 巢 巢 香 林 若 菜 清 人 梅 志 明 朗 尚 史 水 堂 湖 山 日 本 村 湖 山 葉 光 柳 宏 子 井 平 白 柳 捷 治 水 客 席 題 「 左 利 き 」 金 泉 万 葉 選

走り書き器用に書いた左利き
 左利き釘はやつぱり打ちこまれ
 左利き代打まんまと凶に当り
 テーブルの端に坐つた左利き
 まつちよなら器用とはかり思い込み
 食堂の左ぎつちよは見つめられ
 腕相撲合う手がいけない左利き
 三輪車のベルつけかえる左利き
 大掃除ぎつちよの良人よく動き
 左きかせかせ右手も小まめ也
 学校で子がかくして左利き
 麻雀へぎつちよの次で気が突り
 仮縫いで左利きかと尋ねられ
 お茶をのむ手つきこの子も左利き
 天才と見てからぎつちよ叱り居
 戦争のぎせいそれから左利き
 パチンコはあきらめて左利き
 お針子のギツチョを先生もあまし
 左利き三味はまともに持つて弾き
 果物のナイフの素直な左利き
 先生の左ギツリョが気に入らず
 手勝手悪いお点前左利き
 箸枕逆に直して左利き
 頼りない大工に見えた左利き
 左利き一人混つていた握手
 すき焼の世話する女左利き

南 宗 白 柳 古 方 見 子 巢 巢 庸 佑 保 美 白 溪 子 生 々 庵 日 本 村 青 風 満 秋 淡 舟 一 三 夫 言 也 昌 男 湖 山 阿 茶 言 也 恒 明 捷 治 万 葉 席 題 「 左 利 き 」 金 泉 万 葉 選

信用を餌に不正の金を貯め
 映画館の停電アベック嬉しがり
 世渡りのコツも映画のヒントから
 映画から孝養の道教えられ
 無頼など信用せぬと妻が云う
 ランチンを利用してキションかけて見る
 背信を心に詫びて病妻を訪い

紅 溪 風 草 弦 月 緑 星 浪 之 助 芳 雨 エ ス 子 古 川 麗 花 麗 選

川 雑 八 王 支 部 句 会 (ハ 王 伊)
 映画だけが楽しみだと云う祖母であり
 夕食をぬかし映画の列に立ち
 信用のおけぬ相手を好きになり
 年寄の批評泣かせるいい映画
 その儘の田舎をニュー見せて呉れ
 信用はしても一本釘を打ち
 境遇が同じ映画にはろりとし
 芸術の名のつく映画持て余し
 働けど食えぬ人あり映画見し
 名優も年には勝てぬ大写真し
 十年で字幕の裾に名が映り
 母映画ハンカチ二枚泣きに来い
 憂きすてに行く映画とは淋しかり
 映画館時代すれど居る我を識る

泉 水 惠 津 子 柳 葉 浅 太 拜 山 氣 七 有 平 八 郎 笑 有 紅 茶 暁 舟 旋 風 斧 平 魔 花 麗 武 部 香 林 選

文化生活は電化て…
 電 氣 器 具 は 日 立 製 品 を



日立全商品特約店
 三 永 電 氣 株 式 會 社
 大 阪 南 区 八 幡 筋 堺 筋
 TEL ☎ 8040.3211

川 雑 淀 川 支 部 句 会 (大 阪 市)
 阿呆になり切つた今の安らかさ
 阿呆でもけつこう大きな夢を持ち
 阿呆らしい云いつつ長いのにまかれ

和 桑 尚 徳 庸 佑

阿呆らしい過去を捨てて今の地位 水堂
 上役によばれたビール酔いが来ず 全備
 湯上りのビールのよきは聞いたら 敏明
 女同士あけるビールに愚痴が付き 灯子
 アルサロのビール薬のようになり 三十郎
 二杯目は苦いビールと知らず 礼司
 親友の親切落目に よく判り 句念坊
 親友の家に泊ったことに する 東洋男
 親友をライバルにした恋の道 文兒
 親友の会えば怒りも泡と 消え さぎす
 親友が寄って転宅させてくれ 若菜
 矢じしを自あてに降りた国なまり 六童子
 下向きになって矢印がら 下り 幽谷
 矢印の上り橋が並んどり 花村

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

へを緒を通してピタミン効いたら 暖子
 ノイローゼまたピタミンを愛してる 薫風子
 中たるみ顔を見せたり休んだり 晃
 中たるみソロンロ浮気もして見たり 繁雄
 化粧せぬ日もあり恋の中たるみ 豆秋
 さすが父黙然として無表情 梅里
 表情に奥行のある深いしわ 生美
 哀しげな表情へ敷がとまる 亜純
 逆境にいてならされる無表情 一三夫
 風呂銭で袂が鳴った夏の宵 すむ
 竹の筒小銭が貯まる音になり 十悟
 小銭だけ置いてこもり持って行き 庸術
 泣けるだけ泣かせてデジの芯は取れ 恒明
 芯強い女はは笑み失わず 葉光
 技倆もされず秀才芯細く 文秋

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

ほんくらが怒鳴って見ても吾子なり 敏明
 事金になるとほんくらには見え 迷
 優勝のビールに湧いた銀座裏 すむ

湖よキラリと光るうつくしき 眞太郎
 湖にぼつくといわくのある社 清人
 湖をわたっていったにわか雨 旅風
 めだか捕る子供土橋くぐりぬけ 牧人
 めだか捕る子供土橋くぐりぬけ 言也
 水車小屋のまわりの目高引き返えし 天真
 追憶の中にめだかを追った日よ 白柳
 老いたれど舞台狭しと舞扇 蘭
 舞扇かりて社長もくだけて来 五色
 舞扇夫の視線受け流し 鶴汀
 舞扇さすが見事に売れ残り 保美
 妙法の障力を見せた選挙戦 葉平
 七転び又信仰を交えて見る 柳志
 美しい木にまり藻の育つ湖 薫風子
 願い事あって生駒へ酒をたち 暖子
 己さんを祀るマダムの二重あご 三司
 信心の差を玉垣に影り込ませ 玲人
 信心の旅へ自分が捨てられず 水客
 信心の女つがやきながら行く 満潮
 目鼻立ちまで信心でちがって来 梅志

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

子の無心スリ見抜いて母とほけ 句念坊
 靈感にズバリ言われて肝ひやす 白柳
 別室へ通しリベート話合 文秋
 チップが効いたか別室へ通される 清子
 日本髪似合いますかと甘えてみ 井平
 菜の名みたいな新語また生まれ 柳宏子
 末の子新語の意味をソツと聞き 一栄
 新語辞書追加追加で締切れず 守信
 少々の音にも眠る都会の子 清子
 落聞の騒音食べる音もあり 勝柳
 落第も当然と云われるだけ遊び 勝一
 横着なくせにストには先走り 文秋
 甘えたが意外に学校よく出来る 一栄
 ハツとする留守の夫の暖はらい 句念坊

横綱も揃って勝てば意外がり 直人
 意外ですと策士凶星にたじろがす 柳宏子

川村好郎報

衣がえ船場気質がぬけきれず ゆたか
 末っ子が一番先に衣がえ いわを
 マネキン二カ月前に衣がえ 武助
 スリッパもセレに着かえた首になり 水客
 衣がえ船の育ちを書いてくる 佐久良
 拳銃が重く感じる衣がえ 末一
 出せるだけ出して女の衣がえ 雄声
 カーテンを着ているような衣がえ 正史郎
 質札がたもとにあった衣がえ 貴山
 衣がえ妻縫い急ぎ縫いいそぎ 潮花
 やとなさん無理らしい衣がえ 豆秋
 あじさいが窓からのぞく衣がえ きさ子
 歌舞伎座の前で思案がけつたまき 文蝶
 思案顔やおら電気をつけに立ち 菁風
 思案もなし先立つもののない思案 梅里
 社長室入れば社長の 思案顔 好郎
 女今日思案の末を 家裁の扉 六童子
 顔なじみ少し売げたまままで逢い 古方
 顔なじみ温たかそうな声になり 梅志
 顔なじみ話すチャンスがないままに 古けし
 お互いに狙いは違う顔なじみ 徹也
 顔なじみ見えない朝の湯をぬるめ 保美
 顔なじみ今日のアリバイ頼まれる 小石
 顔なじみしようよう出来た頃つぶれ 雪山
 嫁が来て時代の違う舌ざわり 栗郎
 手料理は夫の好きなものばかり 南宗
 親類の御都合主義をしかと知り 乗宗
 欠伸しているのに手料理まだ出来ず 白柳
 雨やどりピアノの主が見とうなり 操子
 お隣の真似も出来ない不申妻なき 浩青
 無邪気な父のあんなまで真似なくせ 生天郎
 真似るのが嫌いであんなじやくにされ 寧々庵
 思案してる間に電車動きだし 浪速子

予告して訪えば主人の割烹着 圭井堂
 手料理を二度喰べたい共縁ぎ 狂二

田中鳥雀報

さてそこてはくせんは諸葛孔明 ゆきら
 あげ底のわすかばかりをほくそ笑む 紫蘭
 金を渡すとほくそ笑む母となり 幸男
 気味悪し妻が何やら北更笑み 和三郎
 指図した通りキツチリ間違われ 司郎
 雨乞が効きすぎず川が見えぬ川 喜由
 出水の予告あじきえ今盛り 親生
 出水の深さまでダンスはげてる 千潮
 生簾入れたらと家計簿にし 鳥雀
 割り込み割り込み仔犬が吠へどかない つる子
 恒例の出水土のう積みに 馴れ 句念坊

川維 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満選

子供ではないと年頃意見のべ 辰春
 喧嘩して梅雨にうたれて子は取り 秀和

品質優良
先カワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画鋏



大阪市東区富野町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

梅雨にまたすねられ居る気象台
 年頃はそんなものだ味方する
 年頃も持つてうわさに耳が立ち
 断崖に追いつめられて以下次号
 年頃の悩みなかなか打ちあけず
 溪流の音断崖を這い上り
 年頃の抵抗無言の日がつづき
 ゆるやかな流れここから滝となり
 崖下の恋を見つけたハイキング
 糊きいた浴衣も出され梅雨が
 警察へ年頃という子と呼ばれ

湖山 天邪鬼 天保鏡 由多志 多可舌 星影 三歩 若人 遊星 耕氏 日満

川雑 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

春霞土筆は伸びる土を割り 智恵美
 春霞ガイドの指さす島がなし 秋月
 春霞猫のあくびがうつって来 一声
 春霞採用通知まだ着かず 美音子
 春霞月給取りが嫌になり 伊久野
 空財布春の霞が呼んで 万女
 失業の人行く土手の春霞 誠人
 春霞江ったことをふと忘れ 亜鳳
 見廻りは祖父の仕事の苗代田 素川
 仲人は苗をとる手を見逃がさず 竜泉
 苗代をするかと雀横目で見 あやめ
 苗代をはめて借りたいこと 浄美
 居候が来てから麦を多く入れ 義男
 精農家麦の顔色気にかかり 良蔵
 麦畑腰をのしの日暮待ち 水仙
 麦の出来が良いと無口がはめて行き 幸仙
 お天気になると雨がさ忘れて来 雁来紅
 タクシーが悦に入る程雨が降り 娘句楽
 父のない暮らしの隅に雨がもり 久米雄
 頬冠りした気で質屋ののれん別け 自誤句
 世の隅に生きて軽音へ頬冠り 天風
 これが恋だろわか胸に問うて見る 柳風子
 老いらくの恋は茶は飲ませられ 東岸

川雑 倉敷支部句会 (倉敷市)

楳原一善報

市場籠今日も平和な日が高る 方大
 努力は努力ワイロはワイロでし 谷水
 鏡の中に職業用の顔が出来 一善
 家中の好みを盛って市場籠 麗水
 市場籠ゆりの出来た重さ知る 銀子
 騒ぎをよそに幹事算盤はしいと 素身郎
 値切らねばすまぬ勝負な市場籠 船坊
 市場籠サラリ帰る重さなり 真奇
 女学生らしいセンチな一目惚れ 隆文
 日雇にまだ夢がある青いね 鳳月
 恋愛を一目惚れとは失礼ね 香春
 幹事にしよう金策の事もあり 三吉
 上役の叱言は幹事まで済み 創七
 値切るのも幹事の役目だと言われ 春也
 酔う暇もない程幹事世話をやき 美音子

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々選

思うこと残らず言つて荷をまとい 一保
 月末の財布に残る請求書 詩郎
 居残りはバアのときり木だと知らず ユリ子
 残金は女房が貯金箱に入れ 枯石
 アルバムに思い出残る数屋橋 鶴丸
 菓子皿の残る一つに手が出かね 乎人
 香水の匂いを満員車に残し 翠月
 彼だけが残され満員バス登車 一机
 子孫への殖林のこす老の銀 素鳳
 特等に残り少ない籠の中 車案齊
 借金と子供残して飲んで逝き 節枝
 心中に無心な子供生き残り 雄々

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

マネキンへ女平気で顔を貸し 実男
 靴磨の商魂お天気も賞めるなり 六花

あいびぎの手紙弟の手も借りる 天作
 警察を出る白粉に振り返り 緑豊
 あいびぎへ酷使されてる赤電話 豊年
 商売で意地張り過ぎて共例れ 青山
 女弟子テレビに夢中手はお留守 千里
 腹の虫泣かして美容食に耐え 弘道
 喫茶店ねばらばお客を持て余し 道衛
 客よせの一つテレビの受像中 箔川
 商魂のも手キヤンシと見込んで居 同

川雑 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

天国で結ぶとおどす雲隠れ 丹謡
 雲隠れする反抗があらわなり 薫風子
 借金も背おって一家の雲がくれ 球絵
 取り巻きが取り遣された雲隠れ 東雲
 月末の大ぼら吹き雲隠れ 義子
 雲隠れされて可愛さよくわかり 半歩
 鉢巻へただこの一手雲隠れ さとし
 二三日雲隠れして猫の恋 山友
 忘れ物から足がつく雲隠れ 泰栄
 雲隠れ噂の遠い国で生き 寿栄
 雲隠れひよっこりパーへ現れる 性人
 雲がくれするに邪魔な泣きはくろ すむ
 保護色の蝶を親子で追い 遍し 一杯
 アリバイを立たすに一人芝居もし 弦月
 一人芝居だったと知った焼酎道 すみ江
 親分へ一人芝居の義理を立て 留三
 結局は一人芝居であった恋 すむ
 一人芝居してるつもりが踊らされ 策平
 大勢が一人芝居にかり出され 正一
 一人芝居もう口三味線の花の下 夢路
 一人芝居と知って最後さよなら 舟遊

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

賞品をけなして去んだ負け惜しみ 魯木
 賞品はもてあますほどでかす 美代

米賽の競争賞品総当り 金仏
 賞品はタワシですよと念おされ 素百々
 蚤一ツ毛猫の中でおさえられ 醉羊
 毛猫から靴を握切つて昼にする 味平

川雑 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

妻四十夫と別に生きて 美沙
 妻なればこそ忍従の四十年 銀念坊
 白バラに似て新妻の清らかさ 匂子
 独り寝を下宿りとさせた風の音 山茶花
 独り寝の天を信じている呼吸 賤女
 大笑い一どにとつと腹が減り 喜楽
 若い母今日もいつぎの子守唄 天竜
 子守きょう波浮の港で子をあやし 七面山

川雑 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報

ボヤだから火災報知を押す 茶の香
 丸ホチャの馬もいるよ馬が言ひ 清子
 月末に払って変りものにされ 千太郎
 作業服脱げば元氣な顔ばかり 宗太郎
 爪伸びるほどに豊かでない心 たつ路
 老母の旅お金いくつにも分れ 義風
 ざるそばの長さへ箸のじれったい 美乃留
 阿保なこと活字になれば借られ 雅城
 宿命のように梅雨がおとすれる 生風
 世の中に向く礼もありはあり ちり葉
 手料理は先代好みとなる お婆 千作
 先代は劣性遺伝だけ残し 吉枝
 先代の自慢ばかりで落ちぶれる 茶仏

川雑 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓選

正札を裏返してから諦らめる 醉雀
 梅雨という諦らめの中のかきまき 壘
 諦らめた子の年合浮ぶ新学期 俊一郎
 公約を派手に候補者並べたて 幸陽

派手な過去秘めたる長屋に居
見栄張った生活へ明日は懸居る
たき火の火足で消しる立ち話し
消えて行く虹より淡く恋の夢
流れ星不安打ち消し帰路につく
迷信が消えて田舎も文化めき
消しこむに心の隅を見すかされ
あれだけの汚職の噂もう消える
メートルにしてから電気消したがり
灯を消して一人で思うことがあり

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

ていのよい断り方と気がつかず 太希志
イェスともノとも言わず結ばれた 一哲
生返事ししがし起つてけつまま 阿茶
生返事して逃げておく寄附の事 同
生返事聞いては居ないよう見せ 瑞川
はつきりと返事ははじか眠は有る 同
生返事はつきりせよと言えは泣く 同
生返事して愛情疑ぐられ 一伸
生返事勝負な妻が痴を立て 生々庵
合わず顔なく手紙で問い合わせ 一哲
問い合せ又御破算になる返事 小石
問い合せ値段の方を先に問い 瑞川
問い合せ税務署でと妻は逃げ 太希志
アンケート返事は秘書にまかし 阿茶
肩書も職と分つて娘泣き 生々庵
問い合せ来たらアソビヨ一言うてや 同
問い合せいい事だけを聞いて去に 小石
大物の不正大袈裟沙汰にされ 一伸
大袈裟な用辭に仏こそばがり 生々庵
大袈裟に泣く手おぼえた一人っ子 阿茶

帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水報

寝狂いの腹へ慈愛の毛布かけ好胎
腹芸になって赤坂まで飛ばし雅堂

酔うた父子に買うてやる買うてやる 京一樓
腹が出て平でおるのがつろつろなり 繁三
親の欲十人並が氣にいらす 甲子朗
帝化新人会
空箱のピースをそつと拾つてみ 本間
花が出て旗出て場出る空の箱 慶一
空箱をさげた白衣に目もくれず 憲坊
空箱のような頭の嫁もらい 福太郎
バスコンで空箱の敷矢圖増え 健次
空箱の中をも覗く探し物 孝夫
思い出は広告マツチの空のかさ 善之助
空箱の予約にもめる子沢山 昌司

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

皺くちやの尻で座席をゆすりとり 草右
人蔭へそつとかくれるでかい尻 方正
よちよちと尻もちついて歩き初め けい女
不吉な予感母無事を唯折り ハナ子
ハンケチで拭き拭き予感おもしろ 春雄
死んでからその口癖の味を知り 夏生
口ぐせも話題にのぼる三回忌 藤児
室々貫祿見せたヒキ蛙 よしを
貫祿あつて社長よりもてている 竹莊
貫祿を台なしにして孫生る 竹青
貫祿があつて代理のようでなし 鬼風
冠婚葬祭でんと坐つていれぬい 愛論
ボスの貫祿せせら笑つて掃蕩うけ 風船堂
尻かるく動ける性で実行員 宏子
聞かずともお女将とわかることり 路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

農繁期なれぬ手つきで手伝われ 宏子
土性骨酒と女に引抜かれ 武進
こんな時によくまあ寝た土性骨 貴山
あの人の助言あつての土性骨 徹也
喜劇見て短氣が少し治つたか 音吉
ブレイキをかけた子供送げぬ 南宗

忍従というブレイキをきかぬ無事 のぼる
ブレイキの何時かほ欲しい社会 圭水
乗り始め先ブレイキを踏んで見る 一好
ブレイキをかけてパチンコ素通りし 句念坊
酒となりやブレイキ効かぬ男にて 雄声
ブレイキは専務が握り会社無事 好郎
ブレイキの効かぬ気性へ氣を使ひ 武助
ブレイキの役に廻つて嫌われる 和郎
小遣があるでブレイキ掛からない 路郎

333川柳会 (堺市)

川村好郎報

招待券同封で来る請求書 冗歩
招待状出しましたがととほけとき 好郎
招待で程よく酔うた星明り 雪山
手を叩く音に招待眼をさまし 南宗
招待券突は見合いをさせるらし 徹也
末っ子に引きずられたり兄と姉 句念坊
おとんは足の腫まで嘔るなり 菓郎
末子と思つていたの後に出来 ゆたか
受売がしつもん受けて怒り出し 新石
針が棒になって受売りはすま来 狂二
受売りは見て来たうにだめを押し 雄声

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

合宿でその清潔がいやがられ 弦月
借金をした清潔とみな知らず 夢路
清潔をただそれだけを望む妻 泰
青年の抱負に何か不足する 三舟
金時めつてる青年がまたふられ 満秋
男嫌女嫌竹の團生に舞う 四月す
海に出て風あり蝶のゆきなすみ 薫風子
蝶の舞うそこら菜の花咲かりなり 牧人
趣味と言えずすけた本を大事がり 庸佑
古本にあって診察順を待ち 文友
古本屋無敵鑑隊見つけたり 山友
日覆の雨古本も借り歩き 十悟
内叙な極に見えて人権主張し 芙蓉路

セオリーを知つて内気なバンドさせ 一杯
カルピスは二杯目内気まだ言ひ 三無子
親の氣をもさせる内気が氣に入られ 寿栄
アベックが青い芝生のまきを越え 一郎
芝生刈る八瀬の女の京訛り 旅風
寝ころんで春の鼓動を聴く芝生 晃
芝青しセパードの毛を梳いてや 舟遊
日の暮れに芝生へボール忘れられ 半歩
一坪の芝生がほしいなと思ふ 千尋
転がって下りる芝生が楽しい子 梅志

羽曳野川柳会 (羽曳野市)

水田帆舟報

花浴びて付つ退院の友を撮る 日南
見合写真けんかの時に出してくる のぼる
写真はかり撮つて緑蔭まともら 尚史
花束をうけるポーズを撮り直し 梅里
呑むだけは呑んで頼る取合ひ 天悟空
顔をかすつても行つたがマダム留守 裕邦
当て外れ同士で呑み屋はつけにされ 天悟空
正直に菓子折だけで礼に来た 好郎
ポケット中探し廻りし鍵で開け 天悟空
なその鍵握る女が出てエント 同
手文庫の鍵は秘めたる恋も知り 尚史

鮎と料理と酒
アペノ橋地下映画食通街
千日前 大劇裏
梅里の店
★大万川柳 (第百二回) を募る
兼題「昼寝」 路郎先生選
締切・八月十五日 (郵政五局以内)
発表・八月廿一日 (店日場迄)
投句は、阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

大萬



ペン の 散歩

▼川柳まつりも迎えて第六回目になった。年々盛大になっていくことは、なんとしてもよろこばしいことである。準備実行委員諸氏のご努力が、打ってひびいて遠来柳人多敷のご出席となった。

▼先生はこととして七十一回目の御誕生日を迎えられたのである。明治二十一年（一八八八）七月十日に、この一大川柳人が日本短詩型文学の一端をになう宿命を負って生まれてこられたのである。七十一星霜の歩みはなみ大抵のことではない。日清、日露、世界第一次、第二次大戦と四たびの国難もあって、ドドのつまり国は敗れたが言論の自由という太陽のほった。文筆家としての先生の舞台はより広くなったのである。これからさき何年も何年も、先生のご長寿を祝う川柳まつりを迎えたいし、その快筆が柳界の指針となつて、われわれをみちびいていただかねばならない。

みおつくし 鳴ったら
ババも帰ってや

ことしのうちわの句である。こにも家庭和合の愛の鐘を先生みずからがついてくださったのである。

▼姫田夕鐘氏と木下幽王氏が亡くなられた。スペースの都合で幽王句抄だけよりだせなかつたが、こういうページを組むときは心が重い。

好きでやっているのだから、仕事はいくらあっても苦にならないが、さびしい気持ちにおそわれるのはたまらない。手塩にかけた愛弟子をこうして失なっていく先生のお気持ちも察しられ、皆様のご健康を切にお祈りします。

▼新刊「新川柳鑑賞」の売れ行きはさすがにすごい。川柳の教科書「川柳のバイロット」こんなキヤッチ・フリーズを作つてみた。

川柳雑誌社

- 麻生路郎
麻生霞乃
中島生々庵
土井文蝶
編 集 局
北川春巢
戸田古方
清水白柳
丸尾潮花
真鍋一瓢
水谷竹莊
不二田一三夫
後藤梅志
橘高薫風子
西川 晃
句 会 部
黒川紫香
総 務 部
八木摩天郎
林 宏子

伺 御 中 暑

▼今秋を期して、先生は随筆集を出版される。そのあとは「旅人」の普及版と、これから出版部も忙がしくなる。

▼本号「社の黒板」にもあるように、八月から西川晃氏（不朽洞会員）を編集局へ迎えることになった。氏は本年の路郎賞受賞作家であり、短歌雑誌の編集経験もあって、こんごの活躍が楽しめる人である。伝統のチーム・ワークをもつて、より発展一路へつき進むことをお誓いする。

▼田に水が欲しいといえは人命や財産まで奪うほど雨が降る。

文化国家が泣きたくなる。
▼日本から世界一の美女が出た。

川柳 婦人友の会

五周年祝賀句会

日時 9月20日(日)

午後一時

会場 中島邸

(電話浜寺八二四)

南海本線諏訪ノ森

駅南西へ三丁

兼題

「嵐」 麻生霞乃選

「海」 丸尾潮花選

「化粧」 中島小石選

「手まり」 高橋操子選

席題 当日発表

(各題三句)

会費 三百円(食費共)

★

投句先 投句だけの方は郵券三十円同封(切九月十八日)

大阪市南区二ツ井戸町二三
山川阿茶苑

女でなくともうれしいニュースである。(一三六)

高峰 柳 見
長野県須坂局内太子町

伺 御 中 暑

川 柳 会

3・3・3

- 川 雑 ・ 豊 中 支 部
- 小 林 山 舟
水 野 水 茶
加 納 山 茶 花
橘 高 薫 風 子
永 藤 弥 平
菊 田 い さ む
小 池 し げ お
竹 内 圭 三
村 上 ゆ ず る
黒 川 紫 香
戸 田 古 方

<p>所題時 9日(日)一時 寝相・余生・濡れる 西宮市鳴尾町 新明和興業KK</p>	<p>所題時 30日(日)六時 冷蔵庫・大掃除・拍手 南海本線諏訪森駅北一丁東側 諏訪森会館</p>	<p>所題時 11日(火)六時 地図・専門家・朝寝 堺市九間町山ノ口八木摩太郎居</p>	<p>所題時 8日(土)六時 木蔭・新車・赤電話 堺市老松町三丁目 島野工業株式会社</p>	<p>所題時 27日(木)六時半 週末列車・味・針 難波高架下 親和クラブ</p>	<p>所題時 19日(水)六時 冷水・名残り・くせもの 旭町二丁目 金塚会館</p>	<p>所題時 16日(日)六時 孝行・松・テレビ 玉出新町通り一丁目 後藤梅志居</p>	<p>所題時 10日(月)七時 週刊誌・倅せ・逃げ腰 市電玉造南百米 大阪信用金庫</p>	<p>所題時 3日(月)六時 悪人・親馬鹿・常連 十三西之町五丁目東淀川郵便局</p>
<p>所題時 9日(日)一時 孤獨・喧嘩・自殺・取得 岡山県久米郡久米南町下号削 四五四 直原七面山居</p>	<p>所題時 25日(日)切 厄年・扇風機・夕やけ・正直 高知市追手筋湖月 川竹松風居</p>	<p>所題時 22日(土)二時 P・ママ・埃・鍵・短刀 日赤岡山支部</p>	<p>所題時 16日(日)夕 喝采・鼻・くらげ 四条繩手 仲源寺</p>	<p>所題時 9日(日)一時 晚酌・サングラス・口紅 港町国鉄職員会館</p>	<p>所題時 9日(日)一時 海・割引・勘違い・チップ 倉敷市水島弥生町四ノ三 相原一善居</p>	<p>所題時 9日(日)一時 米子・縁談・欠伸 米子市公会堂 日本園</p>	<p>所題時 8日(土)六時 河童・小銭・甘党・虹 横山一声居</p>	<p>所題時 21日(金)六時 西宮句会 花火・半端・流 阪神西宮駅北スグ西宮労働会館</p>

お買物は近鉄へ

アベノ
近鉄
電話 8531

スマートで
着心地のよい

**O.S.K.の
レディモード**

大坂商店
大坂市三軒屋町一丁目二番地
電話 (94) 1745-5563

暑中御伺

麻生路郎

柳友の皆さんへ。々々暑中伺いを
したいのですが、勝手ながら路上の
挨拶でお許しを願っています。

printed in Japan

（禁轉載）

川柳雑誌 第三十四年 第八号
定価 六〇円 (送料四円)

昭和三十四年七月廿五日印刷
昭和三十四年八月一日発行

大阪市住吉區区内万代西五丁目二番地
編集兼発行人 麻生 幸二郎
行印刷人 川柳雑誌社

大阪市住吉區区内万代西五丁目二番地
發行所 **川柳雑誌社**
電話 大阪 六〇八一
事務所 一取 七五〇五〇

募集

課題吟募集

倉庫 (十句以内) 川村好郎選
モデル (十句以内) 浜田久米雄選
モデル (十句以内) 水谷竹莊選
居留守 (十句以内) 市場 恒明選
返信 (十句以内) 小川 汎選
事故 (十句以内) 石川 侃流選
(八月十五日締切)

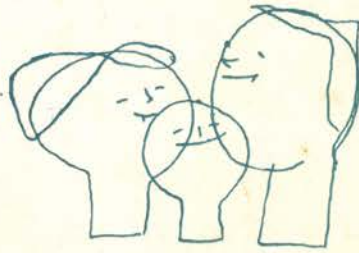
近作柳樽 (雜誌廿句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雜誌十句以内) 北川 春巢選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事
▼ 『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼ 『課題吟』は誰でも投稿が出来る。
▼ 『川柳塔』の投稿は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ最短路

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

便利なダイヤ… 大阪-名古屋 1日9往復
 大阪-名古屋-伊勢 1日7往復
 ハイスピード… 大阪-名古屋 2時間35分
 大阪-伊勢 1時間54分
 名古屋-伊勢 1時間34分

のりば
 大阪上本町・近鉄名古屋・伊勢宇治山田・中川
 ▶ 幹線会社 近畿日本ツーリスト・日本交通公社
 上本町・名古屋・宇治山田の各駅で5日前から発売
 上本町-名古屋250円 上本町-名古屋-伊勢200円



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

麻生路郎先生著
川柳とは何か
 一川柳の作り方と味わい方—
 川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽—そうしたあらゆる十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにかして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は—以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円
 三二〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

麻生路郎著 最新刊

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

★昭和三十四年度の「川柳川柳まつり」の記念出版として、「新川柳鑑賞」を刊行した。曾て東京の至文堂から拙著「川柳とは何か」を刊行した際、巻末に「川柳の味わい方」として二百拾八句を鑑賞したのであるが、本書ではそれ等の名句を省いて、それ以外の名句を鑑賞したものである。従って或る意味に於ては「川柳とは何か」の姉妹篇だと言えよう。
 大阪住吉島区内代 五丁目二五番地
 発行所 川柳雑誌社
 電話 大阪 ④六〇八一
 振替口座大阪七五〇五〇

価二五〇円
 送費三二円
 B6版
 二五〇余頁

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
 昭和三十四年八月一日発行(毎月一回一日発行) 編集 麻生路郎
 発行印刷人

麻生路郎 発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉島区内代西五丁目二五番地 電話大阪④六〇八一

新橋口座大阪七五〇五〇番

定価六十円(送料四円)